

第2部 個人編

1月17日早朝、兵庫県下を襲った大地震は一瞬にして死者5,500名、全・半壊家屋15万戸以上、火災焼失面積67万平方メートル……、と未曾有の大被害をもたらした。

この悲しい出来事を一生忘れることができない。震災から5日間を記してみたい。

1月17日(火)

寝床の中でウトウトしていると、突然ドンドンと下から強く突き上げられた。どうしたのだろう？ すぐグラグラと大きく横揺れがあり地震と気がついた。2階で寝ている3人の息子に地震を知らせようと立ち上がったものの、恐怖で声が出ない。女房が2階に向かって、「机の下に隠れなさい」と大声で叫んでくれた。

大きく、長い地震に堪え、家族、家屋共に無事だった。嬉しい。テレビは阪神高速道路や三宮市街地のビル倒壊を放映している。信じられない光景ばかり。余震が続き怯える。今日の出勤はやめて家族と一緒にいよう。

午後、断水した。続いて電気も止まった。2階から東の空に黒煙が立ち込めているのが見える。長田区の火災の煙だろうか。夜はロウソクをともし携帯ラジオで安否情報を聞く。

全員、身の回り品を入れたリュックサックを枕元に置き、衣服をきたまま雑魚寝、私と妻は交代で眠る。

1月18日(水)

阪神サービスの杉山車に便乗し、6時家を出発、会社に向かう。途中、三宮ビル街を通ると、あちこちのビルの損壊が目に入り、地震の凄さを実感する。7時前会社に到着、神戸郵船ビルが無事で安堵する。ビル内に入ると、通路に煙草自販機が倒れていた。室内では、タリフ、ファイル類がフロアに散乱、OA機器類も移動していた。総務課が対策本部になっており、支店長他頑張っていた。コンテナターミナルが壊滅し、着岸、荷役不可能を知る。課員の安否確認に取りかかるが連絡取れず手間取る。ビル内は断水でトイレは防火水槽から水を汲み流す。昨日、H君、Tさん、Sさんが出勤してくれたのを知る。ありがとう。

1月19日(木)

杉山車で7時前に会社に着く。課員の安否確認を続ける。他所に避難しているのか連絡がつかない。神戸支店は機能不能のため他店に業務代行の依頼手続きをする。ほぼ一日営業課の席にすわり、かかってくる電話の対応をする。僚社の状況は、MOLはビルが倒れ立入禁止、K-Lineは電気系統が故障していた。

1月20日(金)

今日も会社との往復を杉山さんにお世話になった。本当にありがとう。課員の安否確認続ける。連絡つかない人の家まで出向いて安否確認してくれる。ありがとう。

今日も営業課で電話の対応。会社に泊まり込みの人、ご苦労さん。

1月21日(土)

今日は会社休む。太山寺温泉を開放すると聞き家族で出かける。着くと入口はすでに長蛇の列、入場までに30~40分待たされ、浴場に入ったら中は超満員、ほぼ1週間振りの入浴を楽しんだ。

地震直後、約10日間断水した。私が出勤して留守の間、残った家族は走り回って水を確保してくれた。水道が出てわが家が平常に戻ると、妻と二人の息子は板宿駅近辺の避難所へボランティアとして通った。地震は悲しいことであったが、家族はボランティア活動を経験し、助け合いを学ぶことができた。

網本 和明 (神戸海岸病院)

●神戸市北区

それは突然に襲ってきた。平成7年1月17日午前5時46分、最初はカタカタと微震で、「たいしたことないな」と思った瞬間、自らの体が宙に舞い、まるでベッドごとジェットコースターに乗っている様な状態が数秒続いた。やがて徐々におさまってきた時、部屋の中は明り一つもなくなっていた。そして別の部屋で寝ている子供たちが心配になり真暗な廊下を手探りで歩いた。

キッチンに入った時「パリン」と足下で音がしたが、食器が散乱しているとは、気が動転しているため何も考えず子供部屋へ向った。2段ベッドで寝ていた子供たちは無事で「キョトン」とベッドの上で座っていた。「心配ないよ。そこでじっとしときなさい」と声をかけ押し入れの懐中電灯をさがした。明りをつけた瞬間、各部屋の荒れ方を見て呆然とした。タンス、棚の上の物が下に叩きつけられたように無惨にも散らばっていた。

とりあえず余震が続いているため、家族を安全な部屋に移動させたが、外が明るくなるのを待った。耳からは、ラジオの情報が次々に入ってきた。「震度6」初めて体験した恐ろしい出来事(後に震度7に訂正された)。外がやっと明るくなり家族を、親戚の家に頼み、まず実家のある兵庫区へバイクで向った。私は北区の団地住まいで、被害は後で思うと「微々たるものだ」と痛切な気持ちになった。

いつも通いながっている神戸市内が、まるで戦争中にタイムスリップした光景に変わっていた。空はどんよりくもって(各地の大火事にて)アスファルトはまくれ上がり、ビル、人家は崩れ落ち、交通網は寸断されていた。

崩れた家の前で呆然と立ち尽くす人々、助け出そうと倒壊した家の中へ入ろうとして涙ながらに止められている家族——そんな光景を後にしながらバイクを実家に向けた。幸いにも実家は倒れていなかったが、損傷の激しさには改めて地震の怖さを思い知らされた。けが人のいなかったのを確認すると、次に職場である中央区の病院へ向った。デコボコの道路と点灯していない信号に気づかしながらバイクを走らせた。イヤホンから入るラジオの情報は次々と被害の大きさを語っていた。

そして高速道路の倒壊でいつもの通勤路が使えないため、何度も迂回しながらやっと病院にたどりついたが、ロビーには多くのけが人が長椅子の上に横たわっていた。むろん停電のため医療機器が使用できず、応急処置のみになった。各室は棚などが倒れ書類々も散乱しすぐに対応できる状態ではなかった。

幸いにも多くの職員がかけつけて、入院患者の食事の炊き出しや外来の対応等などに対処できたのは大変良かったと思う。そして余震が続く中、夜が更け人生の中で一番長い1日を体験した日でもあった。

梁根 潔 (日本郵船 OB)

●西宮市

阪神大震災は1月17日の未明に起こった。地震で目がさめた。外は月が恍々としてガレキの街を照らしていた。水道はまだ出ているか。ビニールタンクに水をとっておけ、水道、ガス、電気が止まり、真っ暗になった。

電話が鳴っている。京都の長男からだ。「怪我がなく無事で良かった。すぐ車で迎えに行く」。こんな大災害になると当分家には帰れないので、行く先と電話番号を自治会に届け、近所の人に後を頼み戸締まりをして家を出た。

安藤 憲一 (氷川商事神戸支店)

●神戸市東灘区

27回目の誕生日は例年どおり、何事もなくやってくるものだと思っていた。午前5時46分、朝寝坊の私にとっては、かなり早い起床になった。前日の夜遅くスキーから帰ってきて、布団に入ったのは17日の午前0時を過ぎていた。まさか、その時、6時間後、私の人生にとって最大かつ最悪の出来事に遭遇するとは思ってもみなかった。

「ドン」という衝撃で目が覚めた。私の住んでいるマンションにトラックか何かが、ぶつかってきたのかと思い、立ち上がって、ベランダへ出ようと思いきや、西側の窓から「ゴォー」という大きく、鈍い感じの音が迫ってくるような気がした。私が、その方向に体を向きかえたとたん、揺れが始まった。

いきなり大きく揺れ、何かにつかまっていなくて立ってられない状態だった。揺られている中で、色々な音を聞いた。コップが落ちて割れる音、フローリングの床を滑る家具の音、窓が震える音、そして「ズンズンズン」と低く鈍い音。千葉県育ちの私は、地震を何度も体験しているので、すぐにそれとわかった。また、それと同時に、すぐにやむと思った。そして、すぐにやんでほしいと思った。

しかし、すぐにやむことはなく、揺れは続いている。このまま、やむことがないのではと思った。どのくらい続いていたのだろうか、やっと揺れがやんだ。私は、左手で柱をつかんだまま、立ちすくんでいた。膝が、がくがくと震えていた。とっさに、火事になることを恐れ、ガスの元栓を閉めようと考えた。部屋の中には、給湯用湯沸かし器と暖房用ファンヒーターがあり、部屋にいるときはガスの元栓を開けているからである。薄暗い部屋の中、手探りの状態であったが、場所は大体わかっているので、意外と難しいことではなかった。

次に眼鏡を探すことにしたが、部屋の中は、すでに目茶苦茶になっているのでどこにあるのか見当もつかない。明りをつけようとスイッチを入れてみるが、明るくならない。停電しているのである。そこで、自転車につけてある懐中電灯を取りだし、その明りを頼りに探した。眼鏡は色々な物の下敷きになっていたが、レンズは割れていなかった。不幸中の幸いだった。ベランダへ出て、電灯で外を照らしてみた。周りの建物は何事もなく立っているし、火災も起きていないようなので安心した。停電でエレベーターは止まっているので、屋上から階段で1階まで降りた。同じマンションの住人らしい人と顔を合わせ、接

撓もせず、名前も名乗らずに「地震すごかったですねー」と私が言うと、彼も同じようなことを言った。私同様に、彼も怪我をしていなかった。

二人で周りの様子を見に出かけてみることにした。私の住んでいるマンションの隣も、そのまた隣も建物は無事だった。マンションの前の道は、東西に伸びており、西に行くと、阪神御影駅があり、ここから徒歩2分程度である。東に行くと十字路にぶつかり、左に曲がって200メートルほど行くと国道2号線がある。私と彼は、東へ向かった。十字路にぶつかるまでは、倒壊した建物を見ることはなかった。十字路までは、私の住んでいるマンションから、わずか100メートル足らずである。そこで、信じられない光景を目にした。木造家屋が倒壊しているのである。その家だけではなく、その隣でもある。私は、声がでなかった。十字路の対角線の位置から自動車のヘッドライトで、倒壊した家を照らし、屋根瓦を取りのぞいている。何が起きているのかすぐに理解できなかった。理解できなかったが、隣で立ちつくす彼に声をかけ、一緒に作業を始めた。生き埋めになっていることは、作業を始めてからわかった。瓦は意外と重かったが、必死で歩道に向かって放り投げた。屋根を壊し、家具を取り除き、やっと救出できた。男性だった。近所の人だと思うが、持ってきてくれた毛布で彼を包んで運び出した。話ができるので心配ないと思った。そこから3人だったと思うが、救出された。

あとになって、聞いた話だが、その家には、おじいさんがいて、生き埋めになった時に圧死したとのことだった。その家の家族全員を救出したと思っていた私は、それを聞いたとき、何とも言えない気持ちになった。

あたりが明るくなってきていることに気がついた。倒壊しているのはこの家とその隣だけではなかった。そこらじゅうの木造家屋が倒壊している。とんでもない光景を見てしまった。とっさに「何かをしなれば」と思った。気は高ぶっていたが、意外と冷静だったと思う。

少し離れたところにある、2階建てアパートへ向かった。そこは、1階部分が、押しつぶされてはいなかったが、かなり傾いていた。2棟同じ造りになっていて、隣の棟も同じようになっていた。手前にある方の2階に上がって見た。3つある部屋のうち真ん中に、年配の女性が座り込んでいた。腰が抜けてしまっているようだった。私の祖母と同じくらいの年齢だと思った。彼女に『もう、だいじょうぶ、安心して』と話かけ、背負って下まで降りた。下には同じアパートの住人たちが、彼女の無事な姿を見てほっとした様子だった。中には泣き出す人もいた。住人のほとんどは、年配の方々に一人暮らしをしている感じだった。その隣のアパートの2階にも、取り残されている人がいた。

彼は、家財道具で生き埋めになっていて、とても自力では、脱出できる状態ではなかった。腰に本棚のようなものが倒れており、かなり痛がっていた。足にも何かが当たったようだった。彼に声をかけて、時間はかかったが、何とか救出できた。彼は自分自身では歩くことはできないくらいに怪我をしていた。

今まで救出できた人は、それぞれ命に別状はなかった。だから、この地震で命を落とす人などいないと思っていた。それは錯覚であり、大きな間違いであった。次に向かった倒壊家屋は、今までで一番ひどい状態だった。大きな2階建てのアパートだったが、1階部分はすでになく、2階部分も屋根に押しつぶされる寸前だった。素手の人間の手に負える状態ではなかった。解体工事現場にあるような重機が必要だと思った。それでも、1枚1

枚瓦を取り除き、作業を進めた。思った通り、なかなか作業がはかどらない。

私は、イライラしながら作業をしていた。生き埋めになっている人の姿がみえてくるまで、かなりの時間がかかったと思う。背中が見えたので、すこし触ってみた。反応が全くない。叩いてみても同様である。もしやと思い、俯せになっているので、仰向けにしてみた。顔を見た。舌を噛んでしまっていた。もうだめだと思った。急に体の力が抜け、その場に座り込んだ。切ない気持ちになった。その人は、男性で、やはり年配で、一人暮らしであった。コタツに潜りこもうとしていたように思われた。左手が、コタツの天井にのっていた。コタツに潜りこめていたらと思うと、残念でならない。私の住んでいた東灘区では、1,000人を超える死者が出てしまった。その人もその中の一人だった。

私は、幸いにも命を落とすことも、怪我をすることもなかった。それによって生き埋めになっている人を助け出すことができ、何かの役に立ったようでよかったと思う。私は、自分自身が社会に対して役に立っているとか立っていないとか考えたこともなく、また、感じたこともなく今まで生きてきたので、社会と自分とのかかわりを初めて感じた。

この震災は、私にさまざまなことを教えてくれた。一番痛切に感じたのは、当たり前前の生活に感謝することを忘れていたことだ。蛇口をひねると水が出ること、スイッチを入れると明りがつくこと、駅のプラットフォームに立てば、ダイヤ通りに電車がくること、すべて当たり前のものであり、お金を払えば何でも手に入ると思っていた。それは、思い上がりであることに気づき、当たり前が何事にも代え難いことなのだと深く反省し、思い改めた。

最後にこの震災によって尊い命を落とされた方々の冥福をお祈りいたします。そして、いまだに不自由な生活を強いられている方々へエールを送ります。

私自身、これからも神戸の復興に何ができるかわかりませんが、小さなことから始めてゆきたいと思います。

井田 善彦 (郵船情報開発大阪事務所)

●神戸市長田区

1月17日5時46分、2階の自室で激震により目覚めた。そばにあった洋服を手探りでつかみ、下へ降りて行こうとした時、2度目の揺れが起こり、階段途中で収まるのを待ち、両親の寝室へ降りて行った。

すぐ家族の無事を確認したが、父がいなかった。父は昨年定年退職をし、近頃は早朝マラソンを趣味としていた。今朝も5時頃に家を出たらしい。

外に出て、辺りの状況を確認したが、近所の家は瓦は落ち、屋根や壁が崩れ道をふさいでいた。まだ薄暗いため、いったん家に帰り、次の余震に備え服を着替え、母と妹にも服を着るよう言い、3人で父の安否を心配しながら夜明けを待った。懐中電灯を出したが、このような事態を予想していないため、電池切れで使えなかった。車に常備している電灯を明るくなってから駐車場まで取りに行った。

付近で無事な家はわが家を含め、比較的新しい家数軒という有り様だった。道路は陥没または隆起し、怪我をし血を流している人やパジャマ姿のまま皆道路に出ていた。急に駐車場横の古い家に住んでいる親しいおばあさんのことが気になり急いだ。

家は予想どおり倒壊し屋根はわが家の車にズリ落ち、車はペチャンコになっていた。窓を割り電灯を取り出し家の中を確認しようとした。いつ来たのか父が玄関でおばあさんの名前を呼んでいた。戸は歪み開かないため、蹴破り中に入り救出し、わが家に避難してもらった。

家に帰り不安になったのは、火事による類焼だった。4カ所から火の手が上がり30分おきに風向きと火の勢いを確認し、その間に避難準備をしていた。

水道、ガス、電気、電話は使えなかったが、情報は小学校へ行き、ある程度わかった。15時頃になり、どこにも連絡していないことに気づき、電話をかけにNTTに行き、仮設電話を30分程度待ち、派遣先のシャープと叔母の家へかけ、家族の無事と状況を手短かに伝えた。順番待ちの間も50メートル離れたビルはまだ燃えていた。

翌日から熟睡もできず、朝は決まって6時以降は眠れなくなった。救援物資も比較的容易に手に入り、妹の会社の同僚が姫路から食料や飲料水をもってきてくれ、近所の方もお互いに物資を分け合い、震災直後から不自由なく生活ができた。日中は特にすることもなく、友人や親戚宅を訪ね、ビルの倒壊や火災現場を目の当たりにし地震の規模の大きさを改めて実感した。

無事なことは電話で伝えてあったが、実際に顔を見るまでは不安だったらしく、震災から4日後叔母夫婦といとこが大阪から交通機関を乗り継いで、半日がかりで見舞いに来てくれたことは、私達家族を非常に勇気づけてくれた。

翌日私は、叔母夫婦と共に電車で派遣先に状況と、今後の見通しを説明するため、大阪の叔母宅に行き、6日ぶりにお風呂にも入り、当たり前前の生活のありがたさを改めて実感した。

その1週間後、私は会社のご厚意で大阪に住居を提供していただき、現在も休日に神戸に帰るとい生活を送っている。公営施設は目を見張る復興を遂げているが、個人住居はまだ壊すという段階で建設するまでには至っていない。わが家でも最後にガスが4月中旬に復旧するまで家族は不便な生活を送っていた。

伊藤 健二 (日本郵船OB)

●神戸市灘区

阪神大震災は忘れることのできない体験でした。自宅は神戸市灘区の山側で、海拔100メートル。南に市街地、そして鉄道3本、国道や高速道路が4本、そして摩耶埠頭となります。新港埠頭から兵庫区の造船所、港島、六甲島が見えます。

17日未明どんと突き上げられ、激しく揺れた時はジェットコースターのような感じで、身動きができませんでした。揺れが収まり、3階から長男が助けに来ました。箆箆やラックが倒れて動けませんでした。TVやスピーカー等も転落し、ピアノや大型冷蔵庫も見事に移動していました。やがて空が白み、7人家族全員無事なのを喜びながら、庭に出ようとしたら、北隣の学校の石垣が崩壊して、北側が埋まっていました。余震が度々あり、庭にいるのも怖いので、美野丘小学校が離合集散の避難所に指定されているので、講堂に避難しました。

電気、水道、ガス、そして交通機関がないと、シーンと静寂そのもので、黒煙が上がり

チロリと赤い炎が見える無声映画のような光景を呆然と眺めていました。激震地帯震度7の所は阪急電鉄以南で、ご近所ではペシャンコに全壊した家は見当たりませんでした。

日中コンビニエンス・ストアや生協に行きましたが、営業不能でした。自動車も歩行者も信号が消えては同じぐらいのスピードで動いていました。

避難所生活は4月末まで続きました。神戸市が石垣を撤去して、石垣の重みで座屈していた2本のピロティを鋼板で巻き、H型鋼で繋ぎ、フレームを固定して、帰ることができました。

今回の震災で一番大きな収穫は人の世の情けです。游仙会を始め、各方面の友人や親類からの励ましは、私達を勇気づけて下さいました。乗船中友達になったアメリカ人も The Quake でどうしてるかと手紙もきました。

避難所でも全国からのボランティアや各地自治体、民間団体から寄せられたご厚意は忘れることができません。

神戸市老人体育クラブの卓球部員が733人いましたが、死者7人、全壊136人にのぼり、幹事をしているので、再建に向けて努力してスタートしましたが、神戸市から出た方もあり、600名を割る予想です。

游仙会の方にも犠牲者が出ました。大震災で亡くなられた方々のご冥福を祈って擲筆します。

伊藤 隆史 (日本郵船神戸支店)

●神戸市東灘区

その日は、衝撃痛とともに目覚めた。深い眠りの底から私の意識を引きずり出したのは、頭上に倒れかかってくる本棚であった。

ゴー、ガシャン、バタン、バリンとあらゆる音が家中に鳴り響いている。

地震だ！

暗闇の中、立ち続けることさえ困難な状況下、私の足は妻と娘の寝ている部屋に向かって駆けていた。部屋に到着、襖を開けた。何も見えない。暗闇の中から妻の声がした。

「お父さん、大丈夫よ。」妻は子供の上に覆いかぶさり、彼女が寝ていた所にはベビーゲイスが倒れていた。

ほっと一息、とともに再び睡魔が私を襲う。ここで断っておくが、私は自他ともに認めるお気楽お父さんである。今日は午後から東京で会議、新幹線は新大阪発午前10時。家の中はめちゃくちゃで電気もつかない。懐中電灯も何もない。外はまだ暗く、寒い。家族も全員無事だし、ここはもうひと眠りと妻の布団に潜り込む。

しかし、大震災は私の二度寝を許さなかった。社宅全体にガスの臭いがたちこめ、我々はガスの元栓を締めて屋外に避難した。

夜が白々と明けるとともに、事態の深刻さも明らかになってきた。周りの家が倒壊し、道路を塞いでいる。マンションの1階に亀裂が入り傾いている。いつも家族で買い物に行っていたダイエーは1階が潰れてなくなっており、COOPの建物は傾き、その横の建物によりかかっている。周りでいくつもの火の手があがっているのに消防車、救急車は来ない。

このような大混乱かつ交通、通信まで遮断された状況下、ジャパニーズビジネスマンの私はいかに会社にたどり着くかを思案していたが、幸運にも支店からの電話がつながり、課長殿より「出社に及ばず」との連絡を受けた。

早速、家の中を簡単にかたづけ始める。そうこうしている間に再び暗闇が訪れた。電気、水道、ガスの断たれた暗闇の中で我が家は、前日私の誕生日に使ったろうそくに再び火をともし、天然冷蔵庫で冷されたビールを飲みながら、ハム、缶詰、うどん、煮物など、大震災の状況下においては豪華な晩餐をとった。

地鳴りとともに幾度も訪れる余震、絶え間なく鳴り響くサイレンの中、浅い眠りに就く。翌朝、LPガス漏洩のため、付近住民に避難勧告がでた。我が家は自家用車で妻の実家（姫路）に避難することにした。約5時間をかけてようやくたどり着く。震災後初めて見るテレビの報道に、驚くと同時に現場はこの映像の何十倍もひどい状況であろうことが直感的にわかった。

地震から3日後、家族も落ち着きを取り戻したので50ccのバイクを駆って単身戦場へ戻り戦線復帰した。

その途中、眼前に広がっていた崩壊家屋、道路、ビル、陥没し波うった岸壁の景色、街にたちこめる焦げくさい焼け野原の臭いなど、今も脳裏に強く焼きついている。忘れられない、忘れてはいけない体験であった。

最後に地震当日、電話回線が制限されているにもかかわらずお見舞い、励ましの電話を下された方に深くお礼申し上げます。

井上 充 (阪神水先人会, 日本郵船 OB)

●尼崎市

阪神大震災から5カ月が過ぎても、なおテント生活をされている人達が3,000人といわれている。

去る1月17日の早朝、激しい家屋の振動に地震だと飛び起きたが、部屋は暗く倒壊するかも知れぬ恐怖心におびえて静まるのを待つ。間もなく揺れは止まった。すぐ玄関の戸を開ける。外は暗く寒い冷たい風が入ってくる。家族は大丈夫か、皆無事である。とにかくパジャマ着では寒い。余震に備えて厚着をする。トーチランプ（懐中電灯）で照らすと、タンスは倒れている。すばやく飛び起きたのが幸いで、タンスの下敷きにならずに良かった。

外へ出ると近所の人達も皆出ている。幸い倒れた家屋はないが、瓦および外壁モルタルの落下などで不安な顔で立っている。私は余震が来ると思い、火の用心に注意して、石油ストーブなどの火気類の使用をしないように、なおガスの臭いがしていないか、臭いがしていれば、ガス元栓を閉めるように伝えて回った。

ところが、わが家のガス管接合ネジ部が破損して、そこからガスが漏れて、かすかに臭いがしていた。すぐ元栓を閉めたので大事に至らなかった。

やがて外も明るくなってきた。台所は破損した食器類などで足の踏み場もない。部屋はタンスは倒れ、高所の物は落下し、どれから手をつけてよいやらわからない。間もなく電気が来た。テレビを見ると、神戸長田方面は火災発生で火の海となっている。これは大変

だ。ラジオの情報も次々と聞こえる。鉄道はストップしている。私達には援助に行くこともできない。

とにかく室内の整理をせねばならない。昼すぎには少しは片づいたが、水が出ない、ガスも出ない、こんな生活が8日間続いた。室内暖房も石油ストーブ1台で、室温は10度以下である。神戸方面の被害などテレビで見ると、私達の被害は微々たるものである。罹災3日後に奈良の親戚夫婦が苦勞して水と食糧をリュックサックにいっぱい詰めて持ってきてくれたのでありがたくいただいた。

私達の住んでいる阪急沿線では、西宮北口駅付近から宝塚方面へ活断層が生じ、武庫之荘駅前の5階建マンションも倒れ、現在もそのままになっている。私達の付近も瓦の落下とずれを生じ、外壁などの破損で建て替えまたは補修でみんな復興に頑張っている。

倒壊された人達のことを思えば、不幸中の幸だと思っている。今回の震災を体験して、地震のみならず、風水害、火災等においても、常に災害に備えておく心掛けが大切だとつくづく思う。消火器、懐中電灯、ラジオ、水、食糧、さらに防寒衣、特に薬を服用中の人は、その薬などをすぐ出せる所に置いておくことが肝要である。

私は戦時中能登丸に乗船中、ラバウルを出て魚雷攻撃を受けた体験上、戦後も乗船中は停電に備えて常にトーチランプを枕元に置いていたので、その習慣から震災時も枕元に置いていた。今後冬期にはジャンパーを置くことにしている。

最後に罹災で亡くなられた人達のご冥福を祈ると共に、献身的に援助された方々に深く感謝いたします。

井上 裕郎 (阪神水先人会, 日本郵船 OB)

●西宮市

1月17日いつものように、阪急西宮北口駅5時20分発の電車に乗り、三宮駅に5時35分に着き、同僚パイロット3名と共に、阪神パイロット事務所に雑談しながら向かっていた。途中近道して神戸大丸デパート手前、阪神銀行横の狭い路地を歩いていたら、5時46分、突然足もとから押し上げられ、4名ともその場で、ひっくり返ってしまった。

あわてて起き上がろうとしたが、今度は同時に地面が激しく揺れ、座り込むか這うのがやっとだった。と同時にわずか5メートルぐらい後ろのビルの外壁と思われる瓦礫が音を立てて崩れ落ちてきて、その粉塵で、後ろは何も見えなくなってしまった。

同僚Oパイロットの「井上さん、とにかく前の広い路にでましょう」という声で今度は前を見ると、大きなアサヒビルディングが、ゆっくりと左右に揺れていた。そして右の雲の間から、何か雷のような一筋の光が見えたので、この時はまだ地震とは、気がつかず、私は、てっきり地球が爆発したものだと思った。一緒に歩いていたYパイロットは、あとで「おれはてっきりミサイルが当たったものと思った」と言っていたほど。これは、神戸で地震に遭うなんて想像もしていなかったことと、今回は直下型地震で、最初に左右に揺れることがなく、突然まず下から押し上げられ、ひっくり返ったためだと思う。

長く感じられたが、あとで聞けばわずか1分ほどだった。激しい揺れも収まりやっと前の広い道路に出たところで、自動車を止め携帯ラジオを聞いている人がおり、そのとき地震とわかった。

○パイロットが「津波は大丈夫ですか」と聞いたところ、「津波はあるようです」と知らされ、これは大変、とにかく山の方へ逃げようということになり、歩き出した。道路はひび割れしたり、また盛り上がりしており、まだ薄暗く、つまづく有り様で、準備のよいYパイロットが、懐中電灯をとりだし、この後に続いた。途中右手の三宮ダイエー店（食品）が見事に2階が1階に崩れ落ちており、被害の大きいのにお互いに、びっくり。そのうち、誰からともなく走り出し、阪急三宮駅手前まで来たとき、また自動車を止めラジオを聞いている人に、津波を確かめたところ、今度は来ないと教えられ、とにかく阪神パイロット事務所まで行くことになった。

まだ断続的に余震が続いており、狭い路は危険と三宮神戸市役所の前に来たが、ガラスの破片がいっぱい。やむなく車道を歩き、公園を横切ろうとしたが、各所で水道管が破裂し、水びたして歩けず、遠回りしてようやく事務所に着いた。

九死に一生を得た貴重な体験をした一日だった。

上野 善治 (内海水先人会, 日本郵船 OB)

●明石市

夢うつつの中の烈震

平成7年1月14日は第2土曜の学校休日、続いて成人の日、16日は振替休日と今年初の3連休、家内は風邪気味だし、寒い時だから、孫達と早く寝ましょと、いい気持ちでうつらうつらと夢の中、……と突如烈しい上下動が……。2～3秒して気付いて……何だ……これは？ 一瞬50年前の沖縄作戦……雷撃、飛散、気絶した時に逆戻りした感!!

しかし続く強烈な横揺れに……おっ！ これは地震だ!! やっと現実に戻る。10秒から15秒くらいか、あるいはもっと長かったのか。

関東大震災直後の大正13年初に生まれて、71歳にして、建築後20年、建坪70坪、2階建、瓦葺の大きな家が上下左右に烈しく揺れ動く、起き上がれない、この恐怖！ 大体20秒くらいで静かになる。停電で暗い中、柱の非常用トーチランプを取って、まず皆に声をかける。「おーい、みんな生きてるか」「ハイ大丈夫だよ」——やれやれと安心。

家内と次女と孫2人の2世帯同居で娘婿はフランス出張中。突如、ジャーと異状音、探すところ2階トイレの水道管破断噴水。やれやれ、寒い時だし外に出る前にまずは身を固めると、頭から足元までしっかり着込み、水道ガスの元栓締めを外へ出る。

一般にこの辺は地震は少ないとの世評だったが、若い時から何となく北西の山崎断層が心の隅に残っていた。特に家内の寝室は好きな着物が多いので和ダンスがいっぱい、絹の着物は割合に重みもあり、不安定なので倒れ防止にいろいろと工夫していた。これが幸いして地震後よく見ると、太いネジ釘も大きく曲がり、相当な力が掛かった様子がありあり、怪我がなくて何よりだった。

それから一番気になる家作の見回りに出かける。まず築後3年、2階建共同住宅、軽量鉄骨、スレート葺、これは新しいだけに異状なし。次は築後15年、2階建共同住宅、木造瓦葺、これは昔気質の棟梁に丁寧に建てて貰ったので異状なし。

次は長女夫婦と孫2人の居宅、築後30年、2階建木造瓦葺、大分古くなったので、昨今リフォームしたばかりで異状なし。

この頃から外は大分明るくなる。それぞれに当分ガス使用注意喚起してから、最後に別宅へ、これは何と外見被害甚大、まず2階トップの棟瓦は両方に飛散、鬼瓦が残るのみ。

さらにその散った棟瓦が1階屋根に落ちて両方の瓦数百枚が家の回りに散乱していた。

この家は木造瓦葺だが、太い鉄骨にしたので、全応力が棟に放出されたようだ。いずれにしても外壁・内壁・タイル等一部損壊等々すべては工務店待ち。何よりも家族全員無傷・健康を感謝し、被災し悲惨な最期を遂げられた隣人のご冥福をお祈りし、全国、全世界の皆様のお力添えに心からお礼申し上げます。

上原 清志 (日本郵船 OB)

●明石市

1月17日5時46分。その時刻、起床前にトイレに入り便座に腰を据えていたところへ、いきなりドーンと突き上げられ、烈しい横揺れが何秒か続き歩くこともできなかった。

かつて、海上生活で時化の時、経験したあの揺れの感触を思い出した。だが、まさかこの地域に震度6も7もの地震など考えられなかっただけに、信じられない思いでいっぱいだったが、目の前に起きた現実には慄然とするばかりだ。暗闇の中を、かろうじて2階の寝室に戻ると、テレビが落下し、人形ケースは木端微塵で、隣室の木箱は倒れ書籍は散乱している。

「テレビが飛んできたの。ベッドから体が浮き上がったの……これなに？」と、妻は怯えて震えていた。ゴオードド……余震が連続して起きる。とにかくそのまま運を天にまかせて夜が明けきるまでベッドでじっとしているしかなかった。もし倒壊しても2階は多分形のまま1階上にポシャルだろうから2階の方が安全という思いがあった。幸い寝室の頭上には箆箆などもなく怪我することもなかった。テレビは単にポトンと落ちるのではなく、とんできたと言っている。ある人は大型の冷蔵庫が向かって走ってきたとも言っていた。

今回の地震では高級な重々しい立派な家具が凶器になったことが多いと聞く。階下に降りると観音開きの食器棚は倒れなかったものの食器がとび出してほとんど駄目になった。皮肉なもので、気に入った食器が全部割れ、どうでもいいようなのが残って、今、大きな顔をして役に立っている。現役の時ギリシャ等で買った壺や置物は全部落下して割れた。

大屋根の瓦は全部葺き替え、外壁のヒビのコーティング、風呂、床下なぞ年金生活者には手痛い出費が嵩む。だが幸い、断層の西側に位置していたため、この程度の被害ですんでよかったと、神戸の惨状を見るにつけほっとしている。5分ほど歩いたところの新幹線は高架は折れて落下しているので、今回の地震は地盤の固さも多少は影響しているのではないかと考える。

とにかく寒さと震災ボケでしばらく何も手につかない状態だった。神戸でまともに被災した親戚や友人の消息、テレビで見る恐ろしい風景とボランティアの活躍などで、妻は1年分の涙を1カ月で流しきったようだ。

地震から1カ月ほどして三宮に出て、元町に回り瓦礫の街に毅然と建っていた郵船ビルを見た時の感激は忘れられない。今しがた三宮街の惨状を目にしてきた自分には、郵船ビルが、なつかしい不思議なものでも見るような気分だった。

1月17日は忘れられない日となる。いつも6時ごろの起床前の臚気の時、突然下からドスンと音とともに突上げるような強い衝撃とグラグラと大きく家が振動し、地震かと飛び起き明りをつけ、着替えを急ぐうちに停電となり真っ暗になる。昔の習慣でいつも部屋に掛けてある懐中電灯を取り携帯ラジオだけを持ち外に向かう。

玄関は物が散乱しそれらを踏み越え余震が続く中を外に出る。近所の人々も暗い外に出ており、ラジオをかけると寄って来、地震情報に聞き入る。只今の地震は震度6で震源地は大阪湾内と繰り返して報じている。その間も余震が続き皆が不安な気持ちで立ちすくむ。余震が少し落ち着いたので家に入り懐中電灯の明りで見ると、部屋中の物が落下散乱し破損しており呆然とする。

2階に上ると階段のところから同じように散乱して足の踏み場もないようすである。ただ、家具類の倒壊がないので助かる。台所も冷蔵庫が移動しているが食器棚の倒れがなく、落下物の破損はあるが大きな被害はみられず、水やガスも出ている。そのうち電燈がつき、早速テレビをつけるが画面に火災で黒煙が炎々と広範囲に上っている映像や、次々に鉄道や高速道路、高架が落下。車が数台落下した現場やビルや家屋倒壊等の惨状を見て地震の大きさに驚く。外に出、家回りを見るが外壁に小さな亀裂があるが、屋根瓦のズレは見られず、近所には屋根の破損や外壁の一部が剝離したところも見られる。

昼過ぎ4キロぐらいの所にいる子供が来てお互いの安否を確かめ、自分の所では断水しているので水を貰いたいと容器を探し水を持って帰る。東京の子供の所に電話してみると通じ皆の安否を知らず。東京から何回電話すれど通ぜず案じていたとのこと、そのほか各地にするが通ぜず、テレビの被害状況によると震源地に近い自分たちのところより遠隔地の東部の方面の被害甚大を知り、活断層の直下型地震であることを知る。

翌18日にガスが止まり電熱器の用意がなく困り、ガステーブルコンロのあることに気づくがボンベの予備がなく早速買いに出る。閉店の店が多くスーパー等は早や品切れで1日



●ガレキの山、山、山となった長田区松野通付近（1月27日）

中探して、3本だけ手に入る。翌日から数量割り当て販売で早朝から行列して購入。その後ガス復旧まで1カ月以上かかり入浴できなかったのが一番困ったが、避難者の方々を思えば我慢しなんとか生活を送る。

あらゆる交通機関が不通になっているが、市街の災害の状況現場を自分の目で確かめたいと市街地の近くまで通じている電車を利用して徒歩で市街地に入ると、倒壊した家々や電柱等が道路を覆い、瓦礫の散乱した先には黒く焼けたビルが傾いている姿を見て、あまりの被害状況に驚く。街を走る車の数も少なく被災現場跡地に全員無事とか避難場所を書いた板切れが所々に見られる。食事や喫茶する所もなく港の方に行くが、岸壁は亀裂が入り石組が崩れ車が海中に落ちている。

所々陥没して倉庫等が傾斜しており、在港船や人影もない港を眺めると、往時在来船の華やかなところは月末になると新港の1突から8突まで各航路の二引のマークの煙突が並び、支店内も賑々しかったところが偲ばれ感慨無量のものがある。1日も早い復興を祈っている。

上宮 正史 (郵船エイジェンシー、日本郵船神戸支店勤務)

●神戸市垂水区

今日6月24日7時頃から、また、震度1〜2ぐらいの地震が2度あった。6月に入ってからもたびたび余震が発生している。今でも職場では地震の話題が中心になっている。

震災当日は、早めに目覚めていて、隣室の妻が起き出す気配がしていた。突然グラグラと横揺れがあり、さらに激しく家をつき上げる縦揺れ、そして横揺れ、本当に家がつぶれるかと真剣に思った。この恐怖感は、心のどこかにいまだに残っている。

とりあえず、家の中でどこが安全かわからないが1階へ降りた。ラジオは震源地を淡路島北部と報じていた。われわれが住んでいる垂水区霞ヶ丘は淡路島の対岸なので、親戚に無事を知らせるべく、電話をしたが、関東方面しかつながらなかった、会社への連絡も横浜へ知らせた。その時は、垂水が一番の被災地だと直観した。後になってそうでないことが次第にわかった。

震災前日、18時頃地震があったが、全くこのような大きな地震が、この平穏な神戸において起こるとは、予想だにできなかった。山崎断層を発見し、事前に阪神地区地震(活断層)を予測した大学教授は、ポーアイの入院先で倒れケガをし、また、自宅は全壊した旨の新聞記事を読んだ。地震は予想がつかない災害です。もしも、もしも地震警報が出た場合、家を離れてどこかに逃げられますか？ 難しい判断だと思う。重い家具は1階に置くとか、屋根も軽い素材に変えるとかして、個々で地震対策をする以外ないと思う。

家、家族は一応無事(半壊、頭コブ、ふともも打撲)。

地震に際し、準備備品はいろいろ言われていますが、われわれの地域は当日から店も開いていたので、特に困らなかった。電気は2時間後には通った。料理は炊飯器、電子レンジ、電気ポット、オーブントースター、ホットプレートと、卓上ガスコンロを使った。炊飯器で鍋をした家もあった。

水道は1カ月、ガスは2カ月半以上不通になり、水は近所の方の井戸水をもらっていた。給水車はあてにならなかったのが助かった。お年寄りの家庭には、長男が水を持って回っていた。洗濯、トイレ、風呂、本当に苦労した。

震災後の初風呂は、22日（日）YCSの西海さんが迎えに来てくれて家族全員でおじゃましました。会社には、23日から西海、仲川両君の車を乗り継いで早めに出勤した、会社には1時間程で7時頃着いた。郵船社員の方がフロアの上で毛布にくるまって寝ていた。大変な生活の中、頑張って支店を支える人達がいた。食事は用意されていると思うも、持ってきた弁当を食べてもらった。帰りは4時間以上かかったので、翌日より自転車で出勤することとした。加古川市から通う西海さんは、JR垂水駅まで電車が復旧していたので、息子が垂水駅まで自転車に乗って行ってきて西海さんと交替、そしてバスで帰る日が続いた。

震災後9日目、だいぶ出勤する人も増え道路を走れなくなってきたので、路地を走るようになった。路地は瓦礫が多く、下を見て走っていた時、急に掃いたようにきれいな路に入った。眼を上げると、異様、凄まじい、白黒写真のような風景、200～300メートル四方焼け野原、これはテレビで見たこともない場所、夕暮れ前のこの光景を見たら……胸いっぱい悲しみがこみ上げてきた、つらい風景を見てしまったが、家族の皆に、現実を見せねばと思った。

後日、息子と長女を連れてこの場所に来た。またこの場所、長田区海運町大国公園は縁があって子供が何かお手伝いをしたいと言いだし、人を介してお手伝いに連れていってもらったが、その場所が大国公園の南のカトリック鷹取教会だった。

そこで聞いた話だが、100メートル四方で100人が亡くなられ、そのうち8割の方が圧死され、2割の方が焼死されたとのこと。今まで経験したことのない連続、疲れた。

これを書いている時、子供達に今回の地震の感想を聞いた。中3の長男と中2の長女は、「助け合い」が一番大事と言った。家族で屋根にテントを張ることが非常に難しかった時、水がない時いつも近所の人が助けてくれた。われわれ家族はその何分の1しか、お返しができなかったが。

浦野 大二（郵船コンピュータシステム、日本郵船神戸支店勤務）

●神戸市北区

「ズン、ド、ド、ド」、全身が激しく突き上げられた。3日連休が明けようとした朝、そろそろ起きようかとしている時だった。

何がどうなっているのだと考えながら、寝返って起き上がろうと手を突いた時、今度は右に突き倒された。左右に大きく揺れた。更に「これでもか、これでもか」と楕円を描くように激しく揺れた。家のあちこちで物の倒れる音、花瓶、茶碗の壊れる音が真っ暗闇の中を駆け巡った。

私は、「いい加減にしてくれよ」心の中で叫んだ。

「いやーん、何これ!!」と娘が叫んだ。私はとっさに第六感といわれるものに聞いた。すると……大丈夫そのままにしていなさい……と「ご託宣」があった。私はそのままの言葉を怒鳴った、必死とはこのようなことをいうのだなと後日思った。娘は布団にもぐり込んだ様子だ。

何十秒、短いのか長いのか全くわからない時が過ぎた。静かになった。遠くではなお、何かが割れる音が聞こえる。異常に静かに思えた。

私は階段に這って行き、2階に寝ている息子らに「大丈夫か」と怒鳴った。「大丈夫、ちょっと怪我したみたいだけど」元気な返事に安心した。

電気はつかない、懐中電灯のある所まで這っていった。明かりをつけて周りを見た。子供の「おもちゃ箱」をひっくり返したようである。まず居間を少し整理しようと皆にいった。長男の額の傷を応急処置しようと薬箱がある押し入れを明けた。中からいろいろな物が雪崩のように飛び出してきた。

ローソクをつけた。ラジオは、電池が辛うじてあった子供のおもちゃのラジオしかない。我が家の防災準備は全くなされていなかった。関東に育った私達は、地震のないといわれた関西に移って、すっかり油断してしまっていた。

外が明るくなって、そぞろに近所の人達が外に出て話しているのが聞こえてきた。私も外にでた。屋根瓦があちこちに散乱している。あわてて外に飛び出していたら直撃を受けていたかもしれないと「ゾッ」とした。

近所の人達と、皆さんの無事を確認しあったり体験したことなどを話し合った。しばらくすると、なぜか私の膝ががくがく震えてきた。私の身体が緊張からわずかに解かれて恐怖感を表してきた。そう思った。

電話、水道、ガス、電気、すべて止まった。文明の力が全てなくなった時いやに静かに感じられる。

ラジオを聞いていると、神戸市内の被害が特にひどく全滅の様様である。とんでもないことが起こったと愕然とした。

近所から、「緑の公衆電話」から電話がかけられるということが伝わった。まず妻は親戚に無事であることを連絡した。私は午前9時になったことを確認してから会社に連絡した。神戸支店は通じなかった。次に東京本社に連絡した。通じた。無事を知らせ、また東京より内線電話で神戸支店に連絡できる旨を聞いた。神戸支店は無事であったのだ、あの古い建物がよく持ちこたえたと感激した。

余震が来た。「ビシ、ビシ」と柱がきしむ。小さな瓦が屋根から落ちる音がする。しかし家族は案外怖がってはいないのを見て、内心「ホッ」とする。

翌日、新神戸トンネルが通れるという情報を得て車で会社に出かけた。ご飯のあるかぎりのおにぎりを作って出発した。まだ皆は活動を始めていないらしく道はすいていた。救急車や、他県よりの消防車が激しく追い越して行く。神戸市内から出る車は多いが、市内に向かう車はまだ少ない。トンネルはフリーパスであった。

トンネルを出た。目の前のすさまじさに思わず息をのんだ。二十数階のアパートが傾き小さなビルは完全に道路に倒れて燃えている。木造の家はほとんどが、瓦礫となっている。人々は路傍に気力をなくしてただ杳然と座っている。私の顎がガク、ガク震えた。どうしても止まらない。

他県の救急車、消防車、パトカー等がたくさん走り回っていた。もう応援に来ている。なんと頼もしいことと嬉しくなった。

警官の笛で気を取り直し三宮駅前まで来た。見慣れた光景はなくなっていた。正常なビルは一つもない。これほどまでに壊れるものか映画のセットではないのかと思いたい程であった。三宮のビル街は見る影もなく道路が波をうっている。車の底が道路をこする。郵船ビルが何もなかったかのように目の前に厳然と現れた。何か胸の中からこみあげてくる

思いがした。

ビルから少し離れた阪神高速道路が国道に倒壊していた。まだ余震が来ている最中、あらんかぎりの建設重機械で崩れた巨大コンクリートの撤去作業が展開している。すさまじい騒音に、地震の残酷無情に立ち向かう行政府の素早い行動に威厳を感じ、また頼もしいかぎりであり、体の底から元気が湧いてくる思いがした。

社内に入り皆の顔を見てお互いの無事を喜びあった。また不幸の知らせを受けたり、生涯忘れることのない雰囲気味わった。わが社の社員が1人連絡が取れない、明日家を訪ねることにした。

神戸市内で最も被害が激しい所に入った。家はほとんど瓦解し人々は家の窓から出入りしていた。大きな門柱が横倒しになり、屋根はほとんど壊れて落ちていた。柱がむき出しになり無残な姿である。思い出がいっぱい詰まった家であつたらうにと空しい思いである。門扉に引っ越し先が書いてあつた。車に荷物を積んでいた隣の人に安否を聞いてみた。皆無事だそうである。

私は嬉しくなり持ってきたおにぎり、漬物、麦茶等を全部差し上げた。「ありがとう」という間もなく「おにぎり」を食べ始めた。昨日からなにも食べていないという。私はこれほどおいしそうに食べる人を久しく見ることがなかった。

お互いの無事を言い合って別れ、緑の公衆電話を探した。一度来たことがある集会所の傍らにあつた。百円玉を入れ東京本社につながつた。無事を知らせる間もなく切れた。別の公衆電話を探すことにした。あとでわかつたことだが、この時点でNTTの中継機械の電池が切れたそうである。

3日目に入り皆の消息も確認でき、一段落するが、余震はまだ続く、六甲ターミナルは使用不能であり、仕事は全く中断の状態である。地震の不安の中で話す事が唯一の気分転換である。

地震がなぜ起こつたか、大災害が起こるとなぜか人間は反省というか、やるせなさというか、原因を追求したくなるのは私だけではないと思う。今回の地震の原因の言い訳として、「神戸市の開発のやり過ぎで地球が怒つた」「明石大橋の工事に際し、岩盤に深く穴を開け過ぎ、阪神の岩盤に亀裂が入つた」とかいう公的機関の開発工事に原因を求める意見がみられたが、考えて見れば70数年前の関東大震災の時のように、やるせなさが憎しみに変わり、同じ人間同士のせめぎあいにならなかつたのは、世の中の背景か阪神の人柄かは不明だが、不幸中の幸いであつたと感謝しなければならない。

2月に入り神戸港に入港していた本船が大阪港に入港することになり、私達も急遽、臨港店業務を行うため大阪支店に移つた。2、3時間かけて通勤する者、また窮屈なホテルで泊まり込んで仕事をする者、非常事態である。四の五のといつていられない。皆できるかぎり頑張つた。

大阪港は半分は神戸の人と思われるほどで、蜂の巣をつついたような大混雑であつたが、大変な活気があつた。神戸港が仮復旧し現在神戸に帰っているが、今思えばよい勉強になつたと感謝している。

戦後50年営々として築いてきた神戸も零に戻り、また五十有余年新しい神戸を築いていく気構えを見せている。私もこれにあやかりたい。

その時、私は地下鉄に乗って、大阪港の職場へ向かっていました。ちょうど、電車は九条駅のプラットホームに停車するため、減速していました。そして、ひどい揺れの中を走り続けて、ほとんど定位置で停車しました。停車してもなお電車が揺れ続けているので、これは大きな地震だと気がつきました。ポケットの中にいつも持って歩いている携帯ラジオをつけてみると、NHKは「ただ今、関西地方に大きな揺れがあった模様です。詳しい情報が入り次第お知らせします。とりあえず火を消して落ち着いて行動して下さい」としか放送していませんでした。

電車はその場で止まったまま、当分動きそうにありませんので、事務所の車に迎えて貰って無事職場につき、コンテナ船2隻の入港の仕事に従事して9時ごろ、事務所に帰って来ました。もちろん、現場は混乱していましたし、夜に仕事を終え、我が家に帰ってみると、部屋の中は足の踏み場のないほど散乱して、土足のまま入らないと危険なくらいでした。

しかし、幸いにして建物が無事でしたので、避難所暮らしだけは免れました。震災のことについては、私よりももっと酷い目に遭った方々が、多くを語られると思われまので、ここでは少し視点をかえてみたいと思います。

地震直後はほんのしばらく電話が通じていましたが、すぐに関西地区以外の所からの間合わせの電話が殺到したのか、パンクして全く通じなくなりました。外国船の代理店の人が、船と全く連絡が取れなくて、どうしたら良いのか悲鳴にも似た様子で訪ねて来ました。通常は、神戸または大阪ポートラジオを通じてVHFで連絡をとるのですが、代理店からポートラジオに電話が通じないので、全くお手上げです。船舶電話も基地局が潰れてしまって、全く機能していません。

こうなれば、地上の回線を当てにしているはダメだと思い、VHFを使うことを考えました。

港に停泊している大型船、タグボートなど、国際VHFを装備していそうな船を訪ねて、その船のVHFを貸してもらって航海中の船舶と連絡をとるように、代理店の人にアドバイスをしました。その結果うまく連絡がとれたようで、港外に錨を入れて次の指示を待つように伝えることができたそうです。

現場を持つ多くの機関、例えば消防、警察、鉄道、医療、自治体などでも、同じような事態が発生しており、お互いに連絡が取れずに大混乱をしていました。家の近くの救助に来てくれていた自衛隊だけは、しっかりと携帯無線機を駆使して活躍していました。現場との連絡方法を緊急事態発生の際にも確保するために、独立した電源をもつ、電波による通信方法を用意しておくことが、人命と財産を預かる自治体や企業には、是非とも必要なことと痛感される教訓を与えてくれた貴重な震災体験でした。

そして、いつも前向きな姿勢を持つ人々の方が、震災のショックから早く立ち上がる傾向があります。

フルアヘッド!

大久保 洪徳 (日本郵船 OB)

●芦屋市

平成7年1月17日、午前5時46分、突然体が浮き上がり落下、同時に水平方向に激しい揺さ振り40秒（実際は15秒ぐらいの由）。布団ごと体が揺さ振られ移動、極度の恐怖と極度の不安。叫ぼうとしても声は出ず、頭から布団を被り足を屈めてただただ「早く止まれ、潰れるな、早く止まれ」と祈るのみ。

ようやく止まる。隣に寝ている家内に声をかけ無事を確認、「ああ、よかった」。

揺れ返しを待つこと数分、比較的軽い揺れ返し。やれやれこれで一段落、思わず深呼吸。周囲は真暗、頭の中はからっぽ、体から力が抜けてしばらく寝たまま。

枕元の携帯ラジオをつけると「ただ今大阪に地震がありました、棚から物が落ちる程度。京都局は何でもなかったようです。国宝に損傷がなければいいが云々」との放送、しばらくしてようやく「ただ今の地震の震源地は淡路島」と告げる。

頭をもち上げると7、8メートル先で床が光っているのを発見、懐中電灯が棚から落下した拍子に点灯したらしい。取りに立ち上がると足元の様子が異常、気を付けながら懐中電灯を拾いあげ、辺りを照らすと床一面にいろいろの物が散乱。とりあえずベランダに出て辺りに火災のないのを確かめほっとして腰を下ろす。

しばらくして近くの街灯が点灯したのに気が付く。部屋のスイッチを入れる。我が家の様子はすっかり一変、まったく変わり果てていた。枕元には飾り棚が倒れ中の飾り物がことごとく散乱、壁に掛けてあった額・時計・写真などはすべて落下、洋ダンス・食器棚・本棚など背の高い家具はみな転倒、コップ類・ガラス製品・陶器類・扉のガラスなどは粉々に粉碎して一面に散乱、書籍は遠くまで飛び散り、テレビは1メートルほど飛んで落下、冷蔵庫は50～60センチ移動し、扉が開いて格納物が全部飛び出し、重ねて置いてあったものはすべて飛散、家の中はあれやこれやのごった返し、足の踏み場まったくなし。無事だったのは、縫いぐるみのワン公たちと景品でもらった湯呑み茶碗、おおむね無傷のものはお盆と漆器類、あーあ。ガス、水道は止まり、電話はかからず、ただぼんやりと佇むのみ。

さて何からどうするか、気力喪失、片づける気まったく起こらず。

仕方なく手袋をはめスリッパを履いて足元の陶器、ガラスの破片の取り除きにかかる。少し取り片付けて、上の方の落ち掛けている物に手を触れると、ガラガラガラと破片が落下、せっかくきれいにした所は元の木阿弥、破片の片付けは一向に進展せず。

時計を見るとはや午後3時、にわかに疲労を覚える。朝から何も食べていないが、腹は一向にすかず、また食欲はない。とにかくミネラルウォーターを飲み、手近なものを口に放り込む。言葉を交わすのも大儀、溜息をつくだけ。ただぼんやり、いたずらに時間が過ぎ去って行く。

倒れた家具を引き起こす気力も体力もなく、今夜の寝る場所をこしらえ、安全な通路を作って夜を迎えた。

東の空に大きな大きな月が赤み帯びて、煌々と冴えわたっていた。

1月18日、長男が福岡より、長女が奈良県当麻町より、また孫が東京から、それぞれ飲み水と食糧を担いで来援。横浜から駆け付けた次男夫婦の車で21日当麻町（檀原神宮の近く）に移動、長女のところで避難生活を始める。

畝傍の里は、空気がきれいな辺り、静かな穏やかな所でした。

今回の地震にはまったく無防備、本当に度肝を抜かれました。

六甲山が9ミリ北方に移動、かつ6ミリ高くなったという驚くべきスケールの直下型地震で、地面は方々で地割れを起こしました。震源地の淡路島北部から神戸、芦屋、西宮、尼崎にわたり、長さ約70キロ、幅2〜3キロの帯状の地帯が震度7の激震地で、大災害が発生しました。

芦屋市は神戸市と西宮市に挟まれた東西約2キロ、南北約9キロの細長い地形で、人口約8万の住宅都市です。北部の大半は六甲山麓で緩い傾斜の固い土地、また南部はその上に土が堆積した平地で、早くから開け住宅がびっしり建ち並んでいました。その平地の部分が震度7の激震地帯に掛かり、木造家屋は軒並みペシャンコ、全壊、半壊或いは傾き、また外観は無事に見えた家もその後次々に取り壊され、生き残った家は最近新築したものばかりでした。瓦葺きの木造家屋は立派な構えの家も潰れました。

鉄筋コンクリートのマンションも随分やられました。倒壊、半壊、あるいは建物が傾いたり、大きなクラックが入ったりで、ことに1階が店舗、駐車場のビルは1階だけが潰れたものが多々ありました。外観何でもないマンションで「立ち入り禁止」のラベルが貼られたものもあります。主要な柱、梁が損傷したのでしょうか、やがて取り壊しの運命です。

芦屋では約400名の方が亡くなられました。1階に寝ていたお年寄りが多かった模様、約9割が即死だったようです。テレビで見ているより、現場は遙かに遙かに悲惨です。

芦屋は人影の少ない町に変わりました。

精神的ショックも大きく、記憶力減退、集中力薄弱、気力喪失を訴える方が多く、お年寄りはことにひどいようです。私もご多分に漏れず、歳を2つ3ついっぺんにとった感じ、老化が一度に進みました。

しかし、これも人生、元気に暮らしていこうと思います。

阪神大震災で教えられた事

芦屋の地盤のいいマンションで罹災、建物は無事でしたが、室内（7階）は大混乱でした。災害は同じ都市でも場所により異なるので、その点ご了承ください。

〔身近に置いておくもの〕

懐中電灯……夜間は枕元に。

携帯ラジオ……夜間は枕元に。

現金……成るべく多額、1,000円札を含めて、10円、100円硬貨たくさん用意のこと（公衆電話に必要）。

軍手……手袋、スリッパを履いて行動のこと（周囲はガラス、陶器の破片散乱）。〔食事関係〕地震の直後小学校が避難所となり、水、むすびの配給あった由、翌日、自衛隊が小学校に給水所を開設、飲み水の給水開始。

非常食……ミネラルウォーターと直ちに食べられるもの（チョコレートを含め）2、3日分用意しておくこと心丈夫です。

水の運搬……ショッピングカーにバケツを縛り付け、バケツの中にビニール袋を括げて水を貰い、口を絞めて運ぶとこぼれず便利。

生活用水……風呂に水を取っておいた人の話では、少しためていた人は栓が外れて風

呂はカラッポ、たくさん（入浴できる位）ためていた人は水は少し減ったが大部分残っていて大いに助かったと（水圧で栓が外れ難かったのでしょう）。

ウェットティッシュ……水道が出ない時、とても便利、かつ必要。

〔電 話〕地震直後しばらく自宅の電話は役に立たず、公衆電話を利用のこと。ただしテレホンカードは使用できず、10円、100円硬貨がたくさん必要。近いところにはかかり難いので、遠方の人にかかけ連絡してもらるのが賢明。

〔交 通〕鉄道は不通、バスは止まり、タクシーは姿見せず。道路は倒壊したビル、家屋の瓦礫で塞がれ、方々で通行止め。自動車は走れず、頼れるものは各自の足のみ。自転車がすこぶる重宝。

〔家具類〕

高 い 家 具……高さ1.8メートル、奥行50センチ以下の家具、すなわち和・洋ダンス、飾物タンス、食器棚、本棚等、全部転倒。扉のガラス、ガラス器、陶器の破片が広く散乱。要注意。

低 い 家 具……高さ1メートル以下の家具、すなわち背の低いタンス、机、テーブル、椅子、炬燵等は落下物から身体を守ってくれる貴重な防御物となります。

冷 蔵 庫……高さ1.8メートル、奥行70センチの冷蔵庫は、50センチ位移動したが倒れず。ただし扉が開き、中の物は全部飛び出して散乱、引き出しの中の物は無事。

テ レ ビ……1メートル位飛んで落下、最も危険な物、要注意です。後日元に戻すと故障なく映像が写った。

壁 掛……時計、額、写真、皿等すべて落下。紐が切れたり、外れたり、釘が抜れたりさまざま。

〔金融機関〕

郵 便 局……地震の翌々日から貯金の払い戻し開始。

銀 行……関東系銀行の支店は、翌々日から預金の払い戻し開始。
関西系の支店はさらに数日遅れて業務開始。

〔避難の時〕

ガス、水道は元栓を止めて避難のこと（留守中に復旧することあり）。ガス臭くない時は、電気は止めない方がいい（冷蔵庫のため）？

避難先を管理人、近所の方に知らせておくこと。健康保険証を忘れないこと。服用中の薬の名称を正確に覚えておくこと（避難先の病院で薬を貰う時に必要）。

〔復 旧〕

電 気……地震後約30分位で点灯。

水道、ガスの復旧には長時間（1～2カ月）かかりました。

郵 便 物……地震の3日目から配達（ただし、少量）。

〔その他〕

地震直後のことは覚えておらず、何事もメモ帳に書いて置くこと。

近くに住む親戚は一緒に被災して助け合えず、少し離れた処や遠方の親類が救援に駆け付け、また避難所となります。

地震の心配の方には、住宅の精密検査、補強を勧めます。家屋の倒壊を防ぎ、家族の無事を守ることが何より大切です。

大久保 広海 (大東工業, 日本郵船 OB)

●神戸市兵庫区

なんとも不気味な地鳴りのようなものを感じたが、とたんに身体もちぎればかりの激震が襲いかかり、一瞬何が何だかわからなくなった。次の瞬間これは大地震に違いないと思ったが、地震には縁のないはずの神戸でなぜ？ とのおぼろげな疑いは残しつつも、その時和室に布団を敷いて寝ていた私がとった行動は、唯一、掛布団を頭から引っ被って多少なりとも身を守ろうとしたことだけであった。極限状態は20秒とは続かなかったが結構長く感じられ、このまま死んでいく自分を見つめているような奇妙な感覚も走ったのを覚えている。やおら起き上がった後は、助かったとの安堵感よりも暗闇の中でなんとか周囲の状況を確認めたいとする気持ちのほうが先行していた……。

当時、私は花隈の11階建てアパートの3階に一室を借りて単身赴任中の状況にあり、一人暮らしの気安さもあって緊急時の備えにはまったく無頓着であったため、ライフラインのすべてが一瞬のうちに断ち切られてまことに惨めな対応を強いられることになったが、それでも部屋そのものは住むに耐える状態で、残っただけまだ幸運であったと思わねばなるまい。

ここに当時体験した中で最も切実に感じた問題を二つあげることになれば、その二番目は間違いなく「水」であり、せめてミネラルウォーターの2、3本なりとも買い置きする習慣にしておけばよかったと痛感している。そして、その一番目のものといえば「携帯電話の有用性」であった。

すなわち、夜が明けるのを待って、直ちに会社の関係先や東京の留守宅に電話で連絡を試みたが、自宅の電話はまったく機能せず、列に並んで公衆電話からかけても駄目。そこでとにかく会社に行く（アパートから会社まで歩いて40分弱）ことにした。社屋が倒壊



●今にも崩れ落ちそうな阪急高架（三宮一元町間。1月20日）

を免れ保税倉庫もおおむね無事であるのを見て一安心はしたものの、ここの電話ももちろん役に立たず、その安否が気遣われる社員も出勤不能で社内は森閑としていた。今はこのまま会社に頑張っているが無意味と判断したが、とってこれからどう行動すればよいか判断に迷うところであった。

結局は、再びあちこちの公衆電話を試しながらも帰宅するしかなかったが、目茶苦茶になった部屋の内部の壁には以前に制定した会社の「緊急地電話連絡体制」がピン止めされているのが空しく目に入った。そして、部屋の電話が急に鳴り始めたのは丁度そんな状態の時である。電話の主は当社技術部の坂本一課長であったが、聞けば石塚専務と共に自宅のある三木市から危険を冒しつつもマイカーで会社に駆けつけてくれた由であり、たまたま会社に置いてあった業務用の携帯電話を使って安否確認を始めているとのことであった。

電話連絡が可能……この新事態はそれだけで私をおおいに安堵させ、勇気づけてくれたが、その途端に何か食べたくなり、足の踏み場もないほどに変わり果てた食堂や台所で、元氣よく食べ物をあさり始めたのである。

大山 愿太 (日本郵船神戸支店)

●神戸市東灘区

被害を最小限にとどめたビル耐震化100年の計

——我ながら感動した社員の結束と協力

1995年1月17日

地震発生した朝は、東京出張のために、横浜の自宅にいた。その日は、早朝の横浜コンテナターミナル視察があったので、6時には起きていた。テレビのニュースで地震の発生を知った。

——大阪 震度5、奈良 震度4——大きな地震だ。どうしたことか神戸近辺の震度は出ない。神戸には地震はないはずだ。神戸は大丈夫だろう。

すぐ神戸へ電話をかけた。なんどやっても通じない。近畿から遠方の地域の震度はつきつぎにテレビのテロップに流れる。だが神戸の震度は出ない。電話の不通さ加減もどうも不気味だ。

——これは一刻も早く神戸に戻らなければならない。横浜視察に出席するのは中止だ。まず飛行機の予約が先だ。

専用回線を調べた。異常はない。東京本社の相談室を経由して回線がやっと通じた。副支店長の声が飛び込んできた。状況は相当ひどい。

「支店長、神戸支店へ帰るのは途中危険です。支店長はそちらにいてください！」

だが、こうした混乱時に支店の責任者が不在で、指揮命令で不自由をきたしてはいけない。勤めを無視した。まさに早く戦場へ戻らなくてはならないという気持ちであった。

この時間には、地震の状況はある程度報道されていた。支店に帰るルートを考え、伊丹空港ではなく関西空港に着く便を選んだ。そして一番早い便に飛び乗った。

11時半くらいに羽田を出発、12時50分関西空港に到着。伊丹空港から大阪に入る道路は、十三駅周辺で橋が崩れているとの噂。関西空港を選んだのが正しかったようだ。

——参った！ 関西空港も陸をつなぐ路線が不通だ。どうも陸上ルートは駄目らしい。ど

うするか？ 海上ルートがある。やはり同じだ。神戸行きの「ジェット・シャトル」も不通だ。いや徳島行、淡路島の津名行、大阪の天保山行は残っている。徳島は遠過ぎる。天保山は神戸に戻るのに時間がかかる。津名行しかない。津名から神戸へ帰れるのか？ 確証はない。たしか淡路島の大磯から須磨行のフェリーがあるはずだ。震源地の淡路島は相当被害が大きいだろう。最悪の場合は津名から大磯まで歩けばなんとかなる。当たってくだけろだ……。

高速艇で津名に向かったのは、かれこれ14時近くであった。案の定、津名では定期便は欠航していた。同じように神戸に渡りたいという人たちがいたので、皆でかけあった。おかげで臨時船が出るようになった。地震の直後で神戸の状況がわからず、船会社も無理をしたのだろう。

15時45分、神戸港の中突堤に到着。中突堤は予想を絶する惨状だった。船は岸壁にやっと着岸した。あたり一面、目を覆いたくなる廃墟のようだ。岸壁の上はグチャグチャで歩くのが精いっぱいだった。

神戸支店に到着・対応開始

こうして神戸支店にたどり着いたのが、15時55分。一番最初に手をつけたのは、出社した10人くらいの従業員と手分けして、社員の安否確認であった。幸いにして、神戸支店勤務の社員には死者はいなかった。支店社員の安否はなんとか確認できたが、もう少し幅を広げ、被災地にある船員の留守宅の安否を早急に確認したかった。だが、街は危険で、人手も足りない。

そこで神戸支店内で行うのは不可能と判断し、本社へ人材の派遣を要請した。本社には被災地にある船員の留守宅の安否確認と、さらに神戸支店の社員の被害調査を依頼した。それは、支店社員が被害調査をして、客観性を失い公平さを欠くような問題が降りかかるのを避けたかったこともある。

後日、本社から4人ほど支援に来てもらい、急ぎよモーターバイクで、瓦礫のなかを確認に行ってもらった。こうして船員の留守宅を含めた全体の被害状況が、ほぼ把握できた。

当日出勤していたのは、後日LPGタンクの関係で避難の対象になった住吉の社宅に(幸いにひび一つ入らなかった)住んでいた社員であった。そのうち本社から、施設を用意するので家族と支店社員はできるだけ別々に避難させる、という指令が出た。社宅は保安要員のみを残し全員をひきあげさせた。このような対応ができたので、動揺は比較的少なかったかもしれない。とにかく家族の心配をすこしでもやわらげ、社員が業務・復旧に集中できるようにした。

西宮にあった大阪支店と神戸支店の独身寮には、40名ほどが入居していた。だが建物にひびが入って使用できない。大阪支店の勤務者には、大阪で適当なマンションやホテルを探してもらうことにした。神戸支店の勤務者は花隈にある「山手船員寮」へ収容したり、他にホテルも工面した。西宮の寮にいたのでは交通が寸断され、通勤もできなかったが、総動員体制で動くことができた。

あとで冷静に考えれば、東京から神戸に戻ってきた時間が15時55分だったのは、奇跡的であった。自宅は本山にある。神戸支店から12～13キロの距離だが、地震発生時に神戸にいても、支店まで4～5時間はかかったかもしれない。東京から戻ってきたのは、情報が少なく、怖さを感じなかったからだろうが、それはそれで正解だった。

とにかく、東京からたどり着いたときには、支店の辺りは被害が大きく、廃墟そのもので相当不気味だった。それから1カ月間はマンションに帰らずに、支店に泊り込んだ。

100年もつビルに改修

実は、神戸支店のビルは大正7年(1918)に建設された歴史的に由緒ある建物である。約半年にわたってこのビルの大改修工事を行ったが、その際、神戸近郊では地震がないと言われていたが、耐震工事も実施した。外観は昔ながらの姿を残し、内部構造の鉄筋強化によって耐震化を図ったのである。さらに工事を機に、ガス仕様のもをすべて電気仕様に変更した。地下にあった通信・電気設備も上階へ移動し、通信網はすべて専用回線化を図った。いざというときには、井戸水が使えるようにした。アマチュア無線機を設置し各支店を結んだ。

費用も相当かかったが、今回の震災ではすばらしい成果を生んだ。まず建物がつぶれなかった。地震の後も電気はずっと無事に送られてきた。

なによりも幸運だったのは、電話回線・コンピューターが無事だったことだ。コンピューターの塊のような、六甲アイランドのコンテナターミナルも、停電のため3時間中断しただけで回復した。しかし、システム的に問題が発生している危険性があったので、翌日東京からSEを呼び、3~4日で修復した。そのため、本業である荷物の受け渡しが、業界で一番早くできた。このように初期操作がうまくいったのも、建物や電話回線・コンピューターなどが無事だったからだ。

ターミナルの社員の対応も適切であった。たとえば、3時間の停電が回復したあとでは、うまく通電しないと、冷蔵コンテナに入っている製品が腐る恐れがある。社員が命がけで出社し対応してくれた。これによって貨物の損傷も最小限に食い止められた。またお預かりしている荷物の所在や事故が起こっていないか、という東京や大阪からの照会にもターミナルの要員が適切に対応できた。次の週くらいから荷物を引き取りたいという要請にも、すぐに対応できた。

支店の外では、しばらくはガスも電気も送られてこなかった。一般のビルではタンクの水がなくなってからは悲惨だった。だが神戸支店のビルのなかにいれば、電気暖房が稼働しており、寒い時期でも居心地は悪くなかった。

幸い3日後には本社の応援体制が整い、当社は船会社なので、ボートで名古屋支店の応援も得て大阪支店からメリケンパークに救援物資が届いた。それを社宅や寮、支店やコンテナターミナルの事務所などに配給した。

自宅のある本山の周辺では、立派なマンションが5~6棟倒壊している。また古いお屋敷が多く、日本建築はあらかた潰れた。幸い、現在住んでいるマンションは残った。建築後6年くらいでまだ新しかったからだろう。

リスク対応——生かされた船会社の強み

入社して30年になるが、陸上での災害発生件数は少なく、今回の震度はまさに未曾有の経験で、私にとってはリーダーとして初めてのリスク対策になった。当社は船会社なので、当然、海難事故や火災事故発生の危険にさらされている。船の事故などの際の危機管理は、きちんとしたマニュアルができています。また船内の規律の問題も確立されている。

陸上についてはマニュアルはあるが、こんな規模の地震を想定して作成されてはいない。もしマニュアルがあったとしてもいちいち見てはられなかっただろう。こうした非常時

には、「ヒト」しかないと痛感した。運動神経をもった動ける人間が必要で、それを全部掌握していくことが必要だ。

私が幸運だったのは、泊まり込みで業務をしているなかで、意思の疎通が十分にはかかれたことだ。ほとんどの支店の幹部が、苦勞して神戸へ来て、毎日のように意見の食い違いについてディスカッションしたが、最終的には私が決断をした。意見が食い違ってくるとテンションが高まり、いろんな意見が出てバラバラになる危険性がある。

あの混乱のなかで、「当社はやはり船会社だ」とひじょうに感動したことがある。船上で危機に臨んだときには、船員は船長や一等航海士の一つの命令系統のなかで動く。今回の地震後の対応でも、彼らは私の意見を尊重した。結論に至る過程ではいろいろなディスカッションがあったが、最終的には一度決めたことに従っていくという修練ができていた。こういう危機に臨んで、船乗りのいい面が出たことを、仲間に感謝している。

昭和40年に入社した当初の赴任地が、この神戸支店だった。その年の9月に大規模な台風がやって来た。そのときには、高潮のため支店にいた私の膝まで浸水し、近辺で大事故も発生した。42年からは東京勤務で、28年ぶりに支店長として神戸へ戻ってきた。昭和40年以降神戸に自然災害は一度もなかったが、私は偶然新入社員時代遭遇した台風と、この地震で2回とも神戸の自然災害を経験した。

『悲しみを越えて』阪神大震災

1月25日『神戸新聞』に陳舜臣さんがお書きになった『悲しみを越えて』が掲載された。神戸に住む者の心を奮い立たせた感動的な文章である。私の心情を代弁していただいたような気持ちがする。

『悲しみを越えて』阪神大震災 陳 舜臣

我が愛する神戸のまちが、潰滅に瀕するのを、私は不幸にして3たび、この目で見た。水害、戦災、そしてこのたびの地震である。大地が揺らぐという、激しい地震が3つの災厄のなかで最も衝撃的であった。

私たちは、ほとんど茫然自失のなかにいる。

それでも、人びとは動いている。このまちを生き返らせるためにけんめいに動いている。亡びかけたまちは、生き返れという呼びかけに、けんめいに答えようとしている。地の底から、声をふりしぼって、答えようとしている。水害でも戦災でも、私たちはその声をきいた。50年以上も前の声だ。いまきこえるのは、いまの轟音である。耳を掩うばかりの声だ。

それに、耳を傾けよう。そしてその声に和して、再建の誓いを胸から胸に伝えよう。

地震の5日前に、私は5ヶ月の入院生活を終えたばかりであった。だから、地底からの声が、はっきりきこえたのであろう。

神戸市民の皆様、神戸は亡びない。新しい神戸は、一部の人が夢みた神戸ではないかもしれない。しかし、もっとかがやかしいまちであるはずだ。人間らしい、あたたかみのあるまち。自然が溢れ、ゆっくり流れおりの美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる。(『神戸新聞』1995年1月25日)

「新神戸人」誕生

震災が当支店に与えた影響は、さまざまな場面で見られる。社内では独身寮が潰れたた

め若者が一時動揺したが、1カ月くらい経つと見違えるように、たくましく成長した。皆しっかりと初期の動揺から立ち直りそれぞれの持ち場でいろんなことを着実にこなしている。放っておいても大丈夫なくらいだ。

女性社員もよくやってくれた。危険なので入社しなくていいといっても、責任感を発揮して、マスクをかけリュックサックを背負って、交通寸断のなかを毎日来てくれた。皆が一丸となって頑張ってくれたので、当支店では復旧が非常に早かった。

社内でよい変化が出るような対応ができたのは、社員の被害の程度が社員数の割に、他社より小さかったからだろう。それに当支店は社員数がそんなに多くないので、比較的目的が行き届きやすかったことも、大きな理由の一つだろう。

また、私自身にも変化がおきた。まずなんとも神戸が愛しくなった。震災後、お世話になっている神戸の復興のためにできることをやろうと、日銀の遠藤支店長の呼びかけで各社の支店長同士で「神戸よそ者会」という会を結成した。しかし、途中でこの名前を「神戸復興支援！何かを支店会」に変更した。もともと神戸には外来者を受け入れやすい土壌がある。私どもは「よそ者」だが、地震の後始末のなかで神戸市の復興に仕事も含めてかかわると、市は私どもの意見に聞く耳を持ち、神戸市という開かれた体質を感じた。そうこうするうちに神戸は他人の街ではなく、第二の故郷になった。

暗かった三宮の街に灯がともり、なじみの店から「再度営業を始めました」と連絡がくると、何があっても行かなければならないと、居ても立ってもいられない気持ちになる。街や人に愛しさが出てきた。

またこの辛い経験を通して、「関西人」ではなく「新神戸人」という新たな人たちが生まれてきたと思う。たとえば、「新神戸人」によって、水がない地域では水を共有する「助け合い運動」が行われた。震災から約1カ月後に家内は単身赴任先の神戸へ来て、2カ月間水汲みをして「新神戸人」を肌で感じとって帰っていった。これから神戸は、「新神戸人」の新しい活力が注入されて、たくましい精神力でモノの破壊を越えていくだろうと期待している。

——この震災によって、従業員と会社とのギャップが大きくなった、という会社も少なくない。ギャップを大きくしたか、小さくしたかは会社の対応の差だろう。従業員といっても人間である。「ヒト」として非常時にどう対応するか、どう対処できるかは、会社の誠意・度量を問われる重要な問題であろう。

(株)神鋼ヒューマン・クリエイティブ発行『CREO』1995年第1号より要約抜粋)

岡崎 剛 (日本船舶職員養成協会, 日本郵船 OB)

●神戸市須磨区

平成7年1月17日午前5時46分ごろ発生した兵庫県南部地震は阪神淡路大震災となって、神戸市内、特に六甲山系の南側地域に多大の損害を与えた。家屋倒壊および焼損、道路、鉄道の寸断により、被害総額ほぼ10兆円に近い額と推定され、死者は5,000人を超え、今なお、不幸にも避難民となった約25万人(2月10日現在)の人々が、仮避難所で困難な避難生活を余儀なくされている。まもなく、地震発生後1カ月になろうとしているが、たまたま、地震発生時、すでに私は起きていて、後期試験準備のための勉強にかかっていた。

当日は午前5時起床、5時30分から机に向かって英語講読(1)の勉強のため辞書を引いていたところ、急に身体に横揺れを感じ、次いで座っていた椅子を下から突き上げるような強い上下揺れを受け、あれ！ 地震!! と思った瞬間、今度は強烈な横揺れに変化し、もう椅子に座っていることもできず、いったん立ち上がって、よろめくような感じで傍らのベッドに座り込んでしまった。まもなく電灯が消えて室内は暗闇となり、本棚の本が動揺で抜け落ち床面に打ちあたる音がしているが、どうすることもできず、揺れの収まるのを待った。

暗黒の中で随分長い時間が経過したような気持ちでしたが(私自身、揺れは数分間続いたと思ったが?)、実際には、後日発表された公式数値は1分以内、正しくは数十秒とのことであった。ようやく、6時半ごろ(当日の日の出時間:神戸7時5分)付近が明るくなり始め、余震におびえつつ、あとは携帯ラジオに聞き耳を立ててじっと待機していた。その後、屋外に出て外部から自家の周囲を点検、重大な被害をこうむっていないことを確認した。

自宅損害程度:家屋周囲の外塀(コンクリート・ブロック製)約2㎡(1×2m)欠落のみ、原因は手抜き工事のためである(鋼製丸棒一部挿入忘れ)。

かねて日本に居住生活している以上、一生のうちで、一回は自然災害(含地震)に遭遇する危険があるといわれていたが、遂にそれにおつかってしまった。今回この貴重な偶然の機会を災い転じて福となすように、また大学(物理学用レポート)として原稿(レポート用紙8枚分)が手もとにあったので、経験を主体としたものを一部取り上げて取り急ぎまとめてみた。

一面焼け野原となった神戸市内長田区の商店街跡を、所用で中央区内の事務所へと赴く途中、地震発生後6日目にやっと運行を始めた市バス内から見て思い起こしたのは、50年前のB-29による本土空襲の光景だった。天から降る焼夷弾と地中より突き上げた衝撃との違いはあれ、もたらされた惨状は驚くほど似ていた。地震が自然からの奇襲攻撃であったのなら、では奇襲対処はどうなっていたのかと問われなければならない。

対処はハード・ソフト両面から、厳しく徹底的に追及し、再び過ちを犯さないことを次世代のために誓わなければならない。今からでも遅くない。日本全国を地震防災対策強化地域に指定して、監視体制を日常からおこたることなく実施していくことである。災害は忘れた頃にやってくる。[参考資料:朝日新聞1995年2月6日(夕刊)]

岡田 輝男 (日本郵船OB)

●神戸市北区

始めにこの度の震災に際しまして、会社をはじめ皆様方よりお見舞の書状および御心配のお電話をちょうだいいたしまして、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

また震災で被災された方々には心よりお見舞申し上げます。

さてこの度の地震で私なりに体験いたしましたことをつたない文ではございますが、記してみたいと思います。

1月16日21時ごろ、東灘区の娘の家へ行っての帰り道、生田川ランプより山ろくバイパスへ入り長い石引トンネルに差しかかりました。とりとめもないトーク番組を流していた

ラジオが突然の地震情報。東海地方のどこかの軽微な地震速報でした。私は思わず「だんだん近づいてくるな」と助手席の妻に話しかけました。でも妻は「まさか」と意にかけない様子。そのまさかが9時間後にあれだけの大被害をもたらそうとは神ならぬ身知るよしもありません。

1月17日5時46分なにか夢を見ていました。高速のモーターボートが突然大岩にぶつかりこっぴみじんに砕け散ってしまったシーンでした。隣室の妻の叫び声で目覚め、あのなんとも名状しがたい不気味な家を揺する音が耳にとびこんできました。

外へ出たものの真っ暗闇、懐中電灯をたよりに庭へ入りあたりを照らしてみると、ぶきみな地割れが東西に三メートルほど伸びている。ブロック塀も三カ所崩れ、隣家の敷地にかげらが転がっている。やがて空が白んできた。もう一度入念に各所を調べる。モルタル塗の外壁には無数の細かい亀裂が走っている。土台と建物のズレはないか調べてみるがどうやら大丈夫、異状なし。玄関のアーチの柱に太い亀裂がある。これはたいへんだ。もし折れているとしたら大屋根がくずれてくる。でもこれは杞憂にすぎないとわかったのは後日



阪急王子公園駅北側の山崩れ



本山第三小学校の校庭のテント群

の話。道路の向う側から大屋根の状態を双眼鏡でのぞいてみる。これまた異状なし。クーラーユニットの下の瓦が欠けたりずれたりしているのがわかったのは後日の発見、度重なる余震のためか。

おかげさまで、海沿いの各区にくらべ私の住んでいる北区は比較的軽い被害です。電気、都市ガスは無傷でした。水道は水道局が本管の破損状態をチェックのため2日間止まりました。わずか10リットルほどの給水を受けるため、300メートルほどの行列に並ばされました。でもよくしたもので、誰からともなく学校には大きな貯水タンクがあるとの話。たちまち地区に二つある小中学校は大きなポリバケツとペールを積んだ車の駐車場になってしまいました。電話は大混乱していました。一般加入電話は不安定でしたが公衆電話は健在でした。それも無料で。

交通については、当日はバスもストップしましたが1月18日からは特別ダイヤで動きました。鉄道についてはマスコミで再三報道されていますので割愛します。

さて家屋災害については、被害の状態に応じて罹災証明書が発行されるのは、先刻御承知のことと存じます。全壊、半壊、一部損壊の3ランクに分かれていて、それぞれ税制上の特典を受けるのも周知のことでしょう。問題は自分の被害がどの程度のものか、これかわからないのです。区役所の罹災証明書発行センターの窓口での職員の裁量で大きく変わります。屋根瓦が全部落ちて一部破損にされたり、外見上、まったく被害も見受けられないのに半壊であったり、バラつきがひどかったように思います。

岡野 栄子 (日本郵船一機士・岡野 匠の家族)

●芦屋市

あの朝は、なぜか5時過ぎに目覚めました。しばらく布団の中でうつらうつらしていると、ゴーという不気味な音が地を這うように近づいてきて、にわかにくらぐらと部屋中が揺れだし、次の瞬間、あっと思う間もなくドーンと爆撃を受けたような強烈な衝撃に襲われました。ひとりで寝ていた私はもうたまらなくなって、叫び声をあげました。

家の中はめちゃめちゃになってしまい、まともに立っている家財道具は何ひとつありません。ビュービュー冷たい風が入ってくるので不思議に思うと、施錠していたはずのサッシ窓が開いているのです。後でわかったことですが、烈しい揺れのせいで鍵が折れて窓が開いてしまったのです。

「岡野さん生きてるかー」という隣の奥さんの声を聞いてようやく体を動かし、外に出ました。通路に出ると貯水タンクが壊れたのでしょうか、天井からザーザーと水が落ちて廊下は水浸しでした。私の家は、136世帯が暮らす6階建てのマンションで、私たち夫婦は2階に住んでいます。住人は外で夜が明け切るのを待ちました。私も着の身着のままパジャマ姿にちゃんちゃんこを羽織って朝がくるのを待ちました。辺りは都市ガスの臭いが立ちこめ、「たばこ吸うなよ」とみな声をかけ合っていました。阪神高速神戸線に目をやると、もうもうと黒い煙がいく筋も立ち上がっていました。

日が昇ると、親しくしてもらっている飲食店の一家のことが心配で、歩いてそこまで行きました。幸い店舗と一緒にいるその家は建物自体の被害はほとんどなく、みなさんご無事でした。でも周囲の状況はひどい有様で、電柱はいたるところで倒れ、あちらこ

ちらで家が倒壊し、生き埋めになった人を助けてほしいと叫びながら走っている人もいました。

余震に怯えながらも、隣の息子さんに手伝ってもらい家の片付けをしました。地震のあと、人が優しくなったような気がします。荷物を運んでいたら「持ちましょうか」と声をかけてくれる人もいましたし。

食べることは、その飲食店に身を寄せることができましたので、困ることはありませんでした。無事であることを主人に知らせようと日本郵船に電話をしようにもつながりません。公衆電話はどこも長蛇の列ですし、なかなかかけられません。ようやく会社に連絡がとれたのは、震災3日目でした。主人が東京で下船したのは1月30日。連絡がとれなかった時、船上の主人は私が枕元に立たなかったので大丈夫だろうと、自分に言い聞かせていたそうです。

いま思えば、震災が起こる数日前に、近くの堀切川という川に魚が重なるように群れていました。あれが地震の前兆だったんだなと思うと、自然というものは本当に不思議なものだという気持ちを新たにしました。

最後になりましたが、日本郵船のみなさまから多大なるご厚意をいただき、本当にありがとうございました。

岡本 光二 (日本郵船 OB)

●西宮市

予測不能

時計を見たら5時だった。新聞を取りに行き、テーブルにおいて、もう一度床に入る。うとうとし出したらドーンッと凄い衝撃。起きかけたら上下・左右への震動、バラバラと物が飛んでくる。ガツンと左肩に堅い物が当たった。本棚が倒れる。「2階との間が潰れたんだろうか」と思いながら、隣の部屋に出ると食器が散乱しているが、倒れた家具はない。

「オーイ」

「ドアが開かない」

物入れからバドワイザーの箱が倒れ、缶と共に妻の部屋の扉の前に転がっている。蹴飛ばして扉を開け、レインコートを持って妻と一緒に北の広場まで駆ける。

十数人の人がいた。だんだん増えてくる。

214世帯の住むアパートで、芦屋市の東南端の浜辺に建ち東側はすぐ西宮市。西から東へA棟、B棟、C棟と並び、B棟とC棟の間に大きい玄関がある。私はB棟に住む。ここに集まるのはA棟とB棟の住民である。

あちこちで話し合いが始まるが、結局「ひどい地震だ」ということの確認に過ぎない。

近所の会話が耳に入る。

「えらい地震でしたなあ。ところでお宅は地震保険に入ってまっか」

「いやあ、入ってまへんのや。お宅は」

「うちも入ってまへんねん。関西で入ってんのは少ないでっしゃろ」

額はどれだけか忘れたが、私のところは入ってる、と安堵感がやってくる。

30～40分経ったころ、芦屋のあちこちで煙が上がりだした。

「えらいこっちゃ」といいながら、それぞれ家へ帰り出した。

妻は食器を片付け始め、わたしは自分の部屋を見た。本は全部四方八方に飛び散っている。ガラス戸付の本棚は机に寄りかかって無事。後の本棚三つとも倒れていた。小箆箆はちょっとずれたただけだが、その上のカップが2メートルぐらい飛んで、わたしの肩に当たった。痛い筈だ。

食器はほとんど全滅だが、他の道具類は多少動いただけで壊れていないように思える。

隣の家との間にある大きな水道管から水が吹き出している。管理人に伝えた。

「B棟の屋上にある貯水槽から出てるんですよ。水道は止まっているので水も終わりです」

電気はついているが水道もガスも途絶える。電話も通じない。これでは生活はできないな、と考えつつ家へ帰る。

妻にいった。

「このアパート南に傾いているな」

「そんなことはありません」

「何か球はないか」

球をおくと南に転がり出した。

旧制高等学校、大学、会社、それと老後の今日、予測不明な出来事が私をここまで引っぱって来た。

〔市役所判定〕

一、A棟 中破

二、B棟 大破に似た中破

三、C棟 小破

総合判定 全壊

〔管理組合方針〕

第三者を入れ再築の方向で検討中。補修でよし、との主張もある。

岡本 元彦 (日本郵船 OB)

●神戸市垂水区

1月17日の早朝5時46分悪夢のような直下型大地震に見舞われて5カ月が経ちました。あの激震が後10秒も続いていたらどうなっていたかと思うと身震いするほどの恐ろしさを感じます。ちょうど現役時代乗船中に経験した冬の太平洋のシケにも勝るとも劣らないほどのものでした。神戸に地震が発生すると誰も予想していなかった油断が被害を大きくしたことは否めません。まだ強い地震が続く中、家族を1階の部屋に集めて家屋が倒壊しそうになった時に早く安全に避難する手順を話し合いました。散乱し破壊された家屋や道具の中からラジオを探し出し、やっと震源地が直ぐ目の前の淡路辺りで阪神地区に甚大な被害があったこと、火災が起こっていること、交通網が寸断されたこと等々を知り愕然としました。垂水では火災発生がなかったことは不幸中の幸いでした。

地震には、プレハブ様式の建物で瓦は釘付けが強いことを知りました。築後10年の我が家は瓦はほとんど痛みませんでした。外壁のモルタルに大小50カ所ほどのクラックが入

り応急措置をして業者の順番を待っている次第です。家の回りの犬走は大破し、ブロック塀は傾き、下の石垣は大きく破損し、一時はどうしたらよいかと案じました。二次災害のおそれもあるので行政からの指示もあり、早急にとりこわし積みかえてホッとしました。

他県からもたくさんの方が応援に来て下さいましたが、ガス、水道の復旧がなかなかできず困りました。ガスはカセットコンロが役立ち早く復旧した電気とで煮炊きや暖をとることは何とかできました。この寒さの中、テントや避難所で生活をしていられる方はどんなだろうと暖房をひかえたりしました。水がないのには閉口しました。前から火災等の時のために風呂水はいつも溜めおくようにしていましたがそれが本当に役立ちました。

飲み水は、給水車がくると連絡があれば長時間並んでバケツ一杯をもらい、井戸水を汲ませてもらい大切に大切に使いました。そんな時自分も大切なものなのにボトルで水を運んで下さったり、ガスボンベやパン等を交通事情の悪い中、車で運んで下さったり、お風呂に車で迎えに来て入れて下さったり、本当にたくさんの方の親切を受け、人の暖かさ、ぬくもりをしみじみと感じました。普段からのつき合いがいかに大切か、また地域のふれあい、助け合いが大きく広がって復興の大きい力になると強く思いました。全国から延べ120万人ともいわれるボランティアの方々、また救援物資や義援金は被災者の物心ともに大きい力になりました。有難うございました。

この地震の経験から災害は不意に発生する。常に油断することなく「備えあれば憂いなし」の言葉のように非常時に備えて生きることの大切さを知りました。

地震直後は生きていることに感謝をし、毎日毎日を生きることが精いっぱいでした。何もなかった店頭の前のように何でも出まわり人々の暮らしが落ち着いてきたら、どうしようもない現実がいかにして立ち直り復興していけばよいのか、人それぞれに大きい問題となり身心ともに健康を害する人が多くなっているようです。

これから何年かかるかわかりませんが、必ず街の人々も復興します。皆頑張っています。見守って下さい。

尾下 勇一郎 (日本郵船 OB)

●神戸市北区

神戸大地震の勃発

平成7年正月松の内が明けて、まもなく、1月17日午前5時46分突如としてドドッという大きな轟音とともに、下から突き上げてくる地震の揺れに、起きようとしても転んで、起きられず、孤独で恐怖に襲われ、恐ろしい所に住んだものだと後悔の念にかられた。寝ぼけていたためか、停電で暗闇の中で時間もわからず、仕方なく布団の中に入って、沈静するのを待った。静かになったので、雨戸を明けると夜明けが近いことがわかり、かなりたってから、テレビがつき、大地震であることが報じられた。

都市直下型で、阪神地方宝塚、伊丹、西宮、尼崎に及び淡路島に至る範囲の兵庫南部大地震であることがわかった。

2階より1階に移る

昨年(平成6年)暮までは、生活の起居は主として2階で、書斎と寝室を兼ねて生活していたが、昨年年末になってようやく2階より1階に降りて寝ることにしていた。前年の

平成5年春、長男のプレハブ住宅ができたため、妻が長男の家に移ったので、1階の一室が空いていた。その空いた部屋に寝ていたので無事であったが、2階は書棚が倒れて、書籍が散乱し、足のふみ場もないひどい状態であった。

家の基礎にひび割れ

家の基礎にひび割れ数カ所、テラスが基礎から5センチほど離れていた。庭の地割れは幅8センチ、深さ50センチ、長さ3メートルであった。元的地盤より盛土した方が5センチ低く陥没していた。外の石垣は裂けて、高さ2.2メートル、幅15センチ、深さ80センチのところがか所、他2カ所のひび割れは軽微であった。

応急修理する

屋外の流しが壊れて、雨水や流しの水が地中に浸み込むので、これは4月14日に自分で修理した。雨水の排水の桶は庭土の中を通じているのがある。役所の係員らしい人3人が、偶然に私が自分の家の溝の清掃をしている時に見えて、お互いに話をしているのに会ったところ「この土地はあなたのか」と確かめられたので「そうだ」と答え、石垣造成当時のことを話して、修築の必要を聞いたが、役所よりいわれる前にやった方がよいと教えられた。長男の家の修築を業者に頼んだ時に、妻が本家の修築も依頼したところ、早速修理に来てくれて、応急修築は完了した。

修築のやり直し

しかるに“応急修理では不十分だ”と役所より長男の家に電話がかかり、妻がこれを知り、このことを気にして、これまで石垣を築いて植木を植えてきた今までの方針を変えて石垣、植木を取り壊し、車庫にしようと懸命に言い張るが、目下ガレキの運搬は渋滞で経費は3倍かかるとのことであり、早急には難題だが、見積りを求め、必要な工事は出費とにらみ合わせてやるつもり。庭先の石垣の地盤が軟弱なため、コンクリの擁壁を造れば地震、風水害等に耐えられるのではと思われる。

付近一帯の近況

わが家付近一帯、目下家の取壊し中で、すでに10軒壊され内5軒外溝ができてきた。ほとんどプレハブ住宅で屋根を和製瓦より、プレハブ系スレート瓦葺に取り換えているところをよく見かける。

新築はプレハブで

和製瓦葺は粘土葺を載せて敷くので、重量が重くなり建物がその重量に耐えかねて倒壊する家が多いので、和製瓦葺の家はほとんど見かけない。無石綿波状瓦やプレハブ系スレート類をよく見かける。

小野田 恭允 (内海曳船、日本郵船 OB)

◎西宮市

1月17日の早朝、阪神大震災の発生時は、単身赴任先の松山へ帰任するダイヤモンドフェリー(9,400総吨)の中で、船は全然揺れず、タクシーの中は音楽番組、7時ころ下宿に帰りテレビのコンセントを入れて初めて、阪神地区に地震があったとわかりました(松山は震度4でした)。

すぐに夙川の自宅に電話を入れると、家内は洋服タンスの下敷きになったが、たんこぶ

一つですみ、娘は怪我なしと返事あったので簡単に電話を切りました。テレビを見ていると、だんだんと大被害だと放映されているので心配になり、また電話を入れましたが、もう何回かけても通じませんでした。後で106番のコレクトコールではすぐ通話できると聞きました。

だんだんテレビで放映される地震の被害が意外に大きく、これは大変、夙川に帰らねばと、17日夕方、特急「しおかぜ」で岡山へ。岡山在住で尼崎に見舞いに帰る友人の車に乗、龍野までは山陽自動車道を利用、姫路バイパス・第二神明・国道2号線・43号線は、一部通行禁止または大渋滞とのことで、三木・押部谷・鈴蘭台・鴨越・平野を經由し、神戸大学の下、甲南大学の横、甲南女子大学の下と山手の間道を抜けて、6時間をかけ、18日午前4時過ぎに自宅に帰りました（通常は2時間半）。

直接大地震を経験していません。その辺りはテレビ・新聞で詳しく報道されていますので、自宅マンションの再建について、ご参考までに問題点を書いてみました。

A棟(70戸)・D棟(46戸)・E棟(54戸)は半壊、B棟(53戸)半壊・一部全壊、C棟(12戸)全壊の判定を受け、補修費用は1戸当り約700万円、建て直しは約2,600万円+2年間の仮住まい費用と見積もられました。ローンの残っている人、年金生活に入った人、スープの冷めないところに親子で2戸持っている人と、それぞれ資金面の問題。建て直しは容積率(400%のところ建築後の都市開発規制で現行200%……10年、20年先の皆様のマンション建て替えて大問題になると危惧します)。公開空き地を提供する総合設計制度を準用し、なんとか現在の容積率で建て替え可能と安心したところ、現行建築法では全戸235戸の駐車場の設置が義務づけられ(現在54台分)、これでは中に2~3階の駐車場を作らねばならず、美観上問題が出てきました。

以上はほんの一部の問題点です。住民が、補修・建て替えて疑心暗鬼となり、怪電話が入りますので、いつも留守電にしています。

最後に避難のアドバイス。

私立中学・高校へ……暖房施設がある

大きい避難所へ……救援物資が多い

早く避難……良い場所の確保(勝手ですが先着人とのトラブル多発)

大震災より5ヵ月、頑張れKOBEです。

小畑 秀雄 (日本郵船OB)

●神戸市北区

旧家17坪平家南向き、西側中ほどに玄関南向き、西側に座敷、西側に床の間、隣に仏壇、東隣りに居間6畳南向き、東側押入れ、北側中程に9畳の食堂兼台所、北側へ東から西へ3坪ほど下屋を建増しして北側も少し広がっています。食堂の東隣り居間の裏側に4畳半に押入れ付き寝室があります。旧家居間東側押入れに接続して10坪ほど西向き6畳2間を建増しし、旧家居間南側から建増しの部屋へ行き廊下を付けています。

昨年11月ころ、神戸の方にも地震が起こるのではないかとラジオABCから耳にしていたので、4畳半寝室の西側に置いてある2段重ね幅120cm奥行43cm高さ174cmのケ

ヤキの家具を左側に、枕を南にして2人で寝ていますが、家具の上に置いてある物は取り除き、頭が家具の下敷きにならないように心がけていました。

1月17日火曜日、早朝5時46分に震度7.1以上の地震がありました。地震がある30分前に眠りから覚め、起きようと思っているところへドンと音と同時に突き上げがあり、東西へ大きく横揺れが長く続き、横揺れの瞬間2段重ねの家具が2人が寝ている腹の上に倒れてワンバウンドし、家具の重みで身動きできなくなりました。横揺れが長く続き家が倒壊するのではと思い、夢中で掛布団を2人の頭の上まで引き上げ、頭を守るため被りました。揺れが停まったところで寢床から出ようとしても、家具の重みですぐに出られず、もがいてやっと出ることができました。家内は身体が小柄なので家具の重みがかかっていなかったらしく、地震がとまったら抜け出して居間の方にいました。

居間の南側鴨居の右側の柱に非常用懐中電灯を備え付けていますので、懐中電灯で各部屋を見て回り、居間では22インチテレビが台からうつぶせに落下し、座敷の仏壇が台から飛び出して落下、座敷と居間に置いている箆筒は元の位置から飛び出し、引き出しが大きく開いていたり、建増しの北側の部屋も箆筒の引き出しが飛び出し、本棚幅62cm奥行30cm長さ150cmが倒れて、南側の部屋は独身用の家具3棹が倒れ、家具の上に置いた物や家具の中の物が飛び出して散乱し、9畳の食堂兼台所では茶箆筒の観音開き外径幅45cm奥行35cm長さ177cmと、幅45cm奥行30cm長さ89cm観音片開きの2棹は横揺れで落ちようとする食器に押し開けられ、食器が飛び出し落下して破壊し、幅106cm奥行40cm長さ177cmの茶箆筒は幅が狭く長過ぎ、うつぶせに倒れ食器が破損しました。

改正 良夫 (日本郵船 OB)

●神戸市北区

ありし残映

町はパニック (1月17日)

救急のサイレンが飛び へりが舞い

行き交う群や 声失せし町

ライフラインの途絶

ろうそくと携帯ラジオの位置を決め

耐えて復旧の 時を保つなり

崩れたる物干し場には シャツ真っ白く

一昨日地震の 強き生きざま

水とパンを求め スーパーに一列に

飢いのペット 彼も被災者

市内交通途絶・三宮海岸通りビル倒壊

キバをむき はらわたを垂れむくろと化す

谷間なるビルの 青春は過去

スタンドの看板が倒壊 俯して

酔狂の日々の ありし残映

テレビより惨いとおつぶやき 凝視しぬ

アーケード落ちて 空のキャンバス
JR 私鉄寸断、乗り継ぎバス登場
残骸ビル 頭上注意のビラ捲れ
六甲嵐の 寒きバス停
小さな喫茶店
『ガンバロウ!! コーヒー百円』 瓦礫踏み
残り店の灯に 小さき安らぎ
岸壁は毀ちて無影 むら千鳥の
さすらい翔べる 沖に残照
「輪田の泊」の平家には非ずして
望月の 公達驕りは二十年
ポートアイランドに 船姿消ゆ
余震止まらず (2月18日)
継続の余震に 懐中電灯掴み寄せ
いいかげんにせいと 叫びたき夜半
早くも南京町露店復活
呼び込むと テープ演歌がたくましく
裸の町に 復興の波
ニュース紙面も徐々にかすみ
復調か 一面広告が壇を飾り
被災情報は 隅にくぐもる

賀来 純一 (日本郵船 OB)

●西宮市

我が家は西宮市の西側になる大谷町にあり、国鉄東海道線の北側で約25年間住んでいたものであった。平成7年1月17日午前5時46分、激しい地震で目が覚めた。しかし当地では今までに大きな地震が発生した記憶はなく、何の用意もしていなかった。少々揺れたと思っていると、次第に大きな横揺れとなり、驚いて隣に寝ている妻に布団をかぶれといったが、とっさに外へ逃げ出すことは思いつかなかった。あの10秒位のひどい揺れは、体にしみ込んでいるようで、今でも何か大きな音がしたり、軽い振動を感じたりすると地震を思い出して見構える状態である。

その時の揺れ方は、ちょっと説明し難いが、以前の乗船中に大時化にあい、激しいローリングにプロペラのレーシングによる振動が加わり、寝台にしがみついた時が思い出される。その揺れの中に家具の倒れる音や物のこわれる音がものすごくなり、初めてこれは今までにない大地震であると感じた。揺れがやみ、上を見ると家の裂け目が大きく開き、薄暗く空が見えたので、我が家が倒れたことがわかった。妻に声をかけると無事であるとの返事があり安心したが、さて脱出となると、寝巻だけでは寒く外に出るわけにもいかず、手探りで何かないかとさぐっていた。隣家の主人が外より、賀来さんだいじょうぶですかと大声で呼んでくれたので、当方も、だいじょうぶですと返事しながら、探しあてた上着

とズボンをつけている間に、懐中電灯を照らしながら近くまで入ってきて、出る道を示してくれたので、無事に外の道路へ出ることができたが足ははだしであった。

外に出て周囲を見ると、多くの家が倒れており、改めて今回の地震の激しさがわかった。

幸い二人ともけがはなかったが、寝ていた後を見ると、足元にあったダンスが倒れ、その上に2階部分が倒れ落ちたので少しの空間ができており、そのお蔭で体が挟まれることがなく、また一方頭の方にあった整理ダンスの上には隣家の建物がせり出した様になっており、これもまた、私たちを守ってくれたことがわかり、実に幸運としかいえないありさまであった。

今回の大地震の死者の多くが家具や建物の下敷きになり圧死したといわれていることを知り、改めて無事を感謝している次第である。

夜が明けると娘夫婦がやってきて、とにかく彼等が前に住んでいた古いマンションが建て替えられたが未入居になっているので、そこに避難すればということになり、多くの家財は失ったが、学校等の辛い避難所生活はせずにすんだ。地震後、電気はすぐに復旧した。水道はしばらく給水車よりの水運びが続いたが、2月4日には出るようになった。ガスは4月3日の開通となったが、それまでは電熱器やカセットコンロで間に合わせた。その他、被災者としての市役所等への種々の届出や、倒れた家の解体撤去等の仕事を次々と片付けた。4月末には、甲子園浜に建った600戸余りの応急仮設住宅に入れることになり、いちおう落ち着いた生活ができるようになった。

仮設住宅は、6畳、4畳半の2間に台所とユニットバス・トイレ付きで、食器類も少々支給され、後から冷房機も取り付けられて住み心地も良くなったが、住宅の使用期間は1年間とされ、また建物は業者よりのリースであるから大切に使用するようとの制約があり、改めて被災者の今後の生活の厳しさを感じている。

とにかく被災者として各方面よりお見舞をいただき、勇気づけられ感謝しているが、今後の問題については、80歳を越す我が身には重たく感じられる次第である。

影田久保 博 (日本郵船神戸支店)

●神戸市中央区

突然、底から響きわたるような振動により、眠りから起こされた。時計の針は5時46分を指していた。今ごろ、トライエンジンなんかするわけもないだろうし、これは地震に違いないと思った。なぜなら1994年の10月の北海道沖地震の時に、室蘭で停泊中の船で経験した揺れ方と同じだったからである。あの時よりは小さいなと思いながらも、部屋から出て船橋に行ってみると本船の乗組員も何人か集まっていた。別に天井が落ちてきたわけでもないし、過去に船乗り生活で経験した船がひっくりかえりそうな大時化に遭遇した時のことを思うと大したこともないように思われた。

ラジオニュースの情報により阪神地区に大地震が発生したことを知らされた。幸いにも私がポートアテンドの仕事で行っていた和歌山県の由良付近は震度4でこれといった被害もなくやがて津波警報も解除されたが、この時は住み慣れた西宮の街や神戸の街が大被害を受けていたとは夢にも思わなかった。朝になりテレビニュースが黒煙を吹き出している神戸の街の映像を写し出した。死者の数もどんどん増えていった。これはたいへんなこと

になったとその時初めて感じた。神戸という所は地震が起こらないと思われていただけに驚くばかりだった。

会社や西宮寮に電話しても何日間かは通じなくて、状況がわからず心配だった。数日たちょうやく西宮寮の奥さんと連絡がとれ、具体的な様子を知ることができた。それによると西宮寮の建物は、ひび割れ程度ですんだが、各部屋の中はめちゃくちゃで寮の付近の古い家などは壊れてしまったということであった。やがて西宮寮は全員退去することになり、何日か過ぎてから部屋の片づけに由良から帰ることになった。

大阪から西宮北口までは阪急電車が走っていたことは幸いだった。やがて電車の窓から青いビニールシートの屋根が見え始め、徐々にその数は増えていった。傾いた家、壊れた家なども目に入ってきた。西宮北口で下車し、寮までの途中かなりの家が傾いたり壊れたり、全壊の家も何件もあり、それは生まれて初めて見る光景だった。テレビの映像とは違った生の迫力のようなものが感じられた。生涯忘れることができない光景だった。

大きなビルが数多く被害にあった中で神戸支店の郵船ビルだけは無傷であったことは本当に頼もしく思われた。しかし今回の阪神大震災で五千数百名の尊い命が奪われ、家族を失った人、自分の家を失った人たちのことを思うと人ごとではないような気がしてならない。はかり知れない尊い人命と財産を一瞬にして奪いそして破壊してしまう大地震。これほど恐ろしいものはないかも知れない。幸い私は今回の地震にはあわなかったけれど、なにか今後の人生観が変わってしまうようなそんな大きなできごとのように思われてしかたがない。

私が初めて神戸の街を見たのは17歳の時だった。横浜から薩摩丸という貨物船に乗って神戸港に着いた。月日の流れとは早いものであれから20年とちょっと、私の青春は船そのものであり、思い出の多い港の中に神戸も含まれている。あの震災より、はや半年が過ぎようとしている。

しかし、いまだその傷跡は数多く、生々しく残っている。新しい神戸の街が生まれ変わるように、一日も早い復興を願わずにはいられない。

加藤 八重子 (日本郵船神戸支店)

●神戸市東灘区

阪神大震災について書くようにと言われましたが、本当のところ余り思い出したくありません。避難所で地震におびえていたこと、水汲みに苦労したこと、何時間もかかって通勤したこと、いろいろ思い出すと胸が詰まってきます。

1月17日の朝みんなはドンという音がしたと言われますが、私が目を醒ました時は、ゆらっと揺れてアッ地震だと思ってベッドの上に起き上がりました。そうするとものすごい勢いで揺れだし、今までの地震とは違う、このままマンションが潰れて死ぬかもしれないと思いました。

やっと揺れが収まり部屋の様子を見ようとベッドから降りようと思うと周りにタンスの上の部分が落ちてベッドの横もドアの入口も塞いでいました。その間をすり抜けて台所に行くと、大きな食器棚の上が下に落ちていて、食器がほとんど全部割れて足の踏み場もありませんでした。

横の6畳の部屋はテレビとコンピューターが落ち、他の物は全部倒れていました。玄関の横の部屋は本箱が倒れ本が部屋中に散らかって、仏壇は扉が閉まっていたので助かったと思っていたら、中身が全部出て、水と灰で部屋の中がぐちゃぐちゃになっていました。懐中電灯がなかったのでローソクの灯をつけて壊れた食器をダンボール箱や紙袋にかたずけていましたら、夜が明けてきました。

ドアをドンドンと叩く人がいるので開けると、お隣の方が大丈夫ですかと声をかけて下さいました。ローソクの灯を見て危ないから消しなさいといわれ、懐中電灯の小さい物を貸して下さいました。廊下に出て見ると、隣の人達が余震が恐いから今から避難すると相談されているのを聞いて、これはこんなことはしてられないと思い、着替えをして荷物をまとめ玄関に置いて、妹の安否を確認に住吉のマンションまで原付で出かけました。

マンションの外に皆が出ていたので確認の上、家に荷物を取りに帰り、妹達が近くの学校の体育館に避難していたのでそこへ一緒にいることにしました。

落ち着いて翌日ぐらいに会社に連絡を入れ、数日後、副長が確認に来られました。

JRの代替えバスが走り出したので26日に一度会社に出てきて様子を見て、29日に避難所に引き上げて30日より会社に出社しました。

通勤時間は家から住吉まで20分、住吉から三宮までバスに乗って行きましたが、待ち時間が30～40分、乗車時間が1時間30分いつも新幹線の神戸駅の近くの生田川の所で止まってなかなか進まないのバスを途中で降りて会社まで歩いていました。

最初三宮に着いた時ビルの崩壊の余りのひどさにびっくりしました。建物の70～80%ぐらい壊れているのではないかと思いましたが、だんだんと落ち着いてきて整備されてくると最初思ったよりは助かっていることがわかってきました。

会社の行き帰りはいつも上ばかり見て歩いていました。ビルの壁が今にも落ちてきそうにぶら下がっていて大変危険でした。会社に出てきても、工務監督室の人達は皆各地へ出張に出かけていて副長と私だけで、副長もほとんど出張に出かけられていたので、いつも一人で留守番をしていました。

運航船がなかったので余り電話もかかってこず、4月17日以降運航船が帰って来て担当者の人達もぼつぼつ帰って来られるようになったのでほっとしました。3月の決算期にもほとんど人がいず本社へ請求書を送ったり、お願いをして担当者の人に帰ってきてもらったりといろいろ大変でした。

震災より5カ月が経ちましたが、最初の数カ月は生まれて初めて少し情緒不安定になってしまいましたが、これではいけないと4月より生活習慣を震災前に戻したら、やっと落ち着いてきました。自分自身の生活の中では、震災の思いは少しずつ遠くなっていますが、街中を歩くと広々とした土地があらこちらに見えて震災の凄さや傷跡を残しています。震災直後会社へ出てきた時、神戸はこれからどうなるのかなと思っていましたが、近くの中野街に行くと、そこだけが活力に溢れていて、活気があり、その気迫に感化されて周りもだんだんと生き返っていったように思います。その人間のバイタリティーを見て人間もなかなか捨てたものではないなと思いました。

崩壊した街中を歩いている大勢の人間の姿を見て、人間の強さを素晴らしさを感じました。

無茶苦茶な揺れで眼が覚める。起き上がろうとして足がすくわれる。西宮にこんな地震が起こるはずがない！ しかし天井が落ちるかもしれんぞ。この世も終わりか。たいへんな失敗をやらかした時のような不安におそわれる。女房が金切り声で子供の名前を叫んでいる。千鳥足で進み隣の部屋へ飛び込む。いきなりむこうずねを打ちつける。

組タンスがばらばらになって娘二人の布団の上に倒れかかっている。重いタンス板を持ち上げながら声をかけると二人ともギャーギャーわめきながら布団の下からはいだしてきた。長い時間を感じた揺れがおさまった。

天井は落ちていない。全員無事。けがもなし。よかった。昨日タンスを組み立てたが、組立不良が幸いした。夜間電力の温水タワーがひっくり返ったようで、部屋中に水が溢れてくる。

昨日取り付けた天井灯も飛び落ちて枕元でコナゴナ。直撃を受けていれば顔面台無しだった。これも取付け不良のおかげか。外も騒がしくなってきた。コンドミニアムの皆さんが続々と駐車場へ降りてくる。懐中電灯の明かりに顔を血だらけにした人が浮かび上がる。ようやく薄明るくなってくるとまわりの様子がわかってくる。

すぐそばを走っている新幹線の高架が何か所にもわたって落下している。屋根しか見えない家、傾いたままかろうじて立っている家、一階がなくなった文化住宅、その下にペチャンコになった車が数台。

遠く数カ所に煙が立ちだした。わがコンドミニウムはあちこちクロスクラックがはいっているもののなんとか持ちこたえたようだ。

阪急電車の方へ向かうほど様子はひどい。国道171の橋桁は車3台を乗せたまま線路に落下、昨日入った駅前のショッピングビルは1階がない。4階がなくなったアパート、傾き交差して道路をふさぐ電柱。

翌日から空気の抜けた自転車であちこちみてまわった。余震におびえて傾いた家の前でテントを張る人、崩れた家から黙々と家財道具を取り出す人。悲しみを抑えて遺体を運び出す人。炊き出しをする人、リュックを背負い線路を歩く人。水を求めて列を作る人。たぶん終戦直後と同じような光景が毎日繰り返される。生活回復の作業を淡々と進める人々を見るにつけ、戦後の復興を成し遂げたのと同質の日本人のバイタリティーと素晴らしさを感じさせられる。

バンコクの勤務が残り少なくなったとき、家族に「さて、どこへ帰ろうか？」と尋ねると皆一様に「横浜がいいね、市が尾のあたり」といったが、「横浜は地震が強いぞ……！」ということで16年前に買ってまだ住んだことのない、甲東園のマンションに帰ることにしたのだが。

帰国後6日目、引っ越し3日目に大地震にあうとは……何と運の悪い。いやいや、活断層の上で親子4人無事であったことは、何よりラッキーといわねばなるまい。40日の水くみ、ガラクタ捨てで体力もついたし。

我が家には生後6カ月のオカメインコがいる。名をふくちゃんというが誰に似たのか無口で、あるいはただの怠け者なのかオハヨウの挨拶しかしない。

ところが、平成7年の年が明けた頃からどうしたわけなのか口数が多くなり、電話のルルルという音とか意味不明のことを口走るようになってきた。しかしながら、そのときは養い親の欲目というもの、ふくちゃんもやっと心を入れ替え発声練習に励んできたかと世の親同様単純に喜ぶ日々であった。お喋りは約2週間続き、これは本物だと安堵の胸をなでおろした翌日、それは突然襲ってきた。

「一体これは！」わけのわからない出来事に、気がついたとき私の頭は襖に打ち続けられていました。おそらく咄嗟に襖にすがりついたのであろう。鳥かごがひっくり返り、その中でインコが騒いでいるのが暗闇のなかで聞こえるが、揺れは強くなすすべもなかった。まるでロディオに乗っているようであったと、後日知人は言っていた。そのうち娘と息子が無事な姿を見せた。二人は何事もなかったように落ちついているように思えた。

揺れは強くそして長く続いたが、今にして思えば食器の壊れた音や諸々の家具が転がり落ちる音はまったく耳に入らなかったのが不思議だ。

揺れがようやくおさまったころ電話が鳴った。「大丈夫か？ テレビで知った」。赴任先の夫からの電話であった。「皆無事です」と私。電話はその1本を最後に、その後5日間は何の反応も示さなくなった。それから、強い余震が何度も襲ってきた。揺れの中で出口を確保し、ズックを履いて食器や家具でゴチャゴチャになった家の中を歩きまわった。地震は高価な食器などが好きであった。

陽がようやく射し、それまでの驚愕、不安、恐怖を幾分なりとも和らげてくれた。そのころになって近所からは人声が聞こえてくるようになった。街が見渡せる場所にいとみると、東も西も黒い煙が立ちのぼり、ただ近所の人たちは呆然と眺めているだけであった。幸いなことに、その日の夕方になって電気だけは復旧した。吹っ飛んで横を向いていたテレビのスイッチを試しにと思えば入ると、倒れたビルなどが映し出されており、もっと被害のひどかった所があるのに改めて驚かされた。

次の日からは、水の確保と公衆電話の順番待ちが大きな仕事となった。夫が単身赴任先から半日以上をかけて帰宅したときにはずいぶんと心強く思ったものだ。

地震により神戸の都市機能は麻痺してしまった。長い間お風呂に入れず、娘の受験は、毛細血管のようになってしまった交通機関に頼らざるを得なかった。結局、水道復旧が2週間後、ガス開栓が1カ月後となった。その一つ一つの回復をこれほど待ちわびたことはない。この間、本当に多くの方々からの有形無形の支えがあった。会社からの支援もありがたく思った。順調に日常生活が戻ってきたのもこれらのおかげだと信じている。

あの時、断層の上に住んでいたため命を失った人も多いが、活断層は私どものマンションの敷地をもかすめていたようだ。本当に運がよかったとしか思えない平成7年1月17日の地震であった。今も余震は続いているが、だんだんと収まっているようです。強い余震の直前にも騒いでいたふくちゃんは、再び無口に戻り、叱られながらも自分の好き勝手なことをして遊んでいる毎日です。

床の強力な揺らぎを夢から現実のものとして認識したその瞬間、何が起こったのかわからな
いまま目を覚ました妻と娘を、自身の体でかばっていた。とりあえず懐中電灯を捜し、家
の中の惨憺たる状況を見極める。食器類の3分の2は損壊している。電気、ガスはダメ、
水道はとりあえず使えるので風呂に溜めた。これが、他の激震地区に比べごく軽微な被害
であったことは、その時知る由もない。

この時初めて気づいたのは、今流行のコードレス電話は電気がなければただの子供のお
もちゃということ。幸い古い電話を残しておいたので、それを散乱する家具類のなかから
発掘、まず同じ須磨区内に住む妻の実家に電話、とりあえず実家および我が家の負傷者な
きを確認し合う。

日の出の7時ころ、神戸支店に何度も電話するも通じず。東灘区社宅の同課員の家に電
話を通じたので状況を聞く。社宅の人は今全員外に避難中だが、家の中は「少々家具が壊
れたくらい」とのこと。それを聞き、実は社宅周辺の被害の方が大であったのに、またも
や我が家周辺の方が被害甚大だと思ってしまう。情報不足のなせるわざである。

運航課扱い在港船2隻の安否が気になり出した9時ころ、やっと会社に電話がつながる。
連絡船にて出社した課長と、車で出社した課員計2人が運航課に出社していた。在港船2
隻のうち1隻は荷役せずに本日他港向け出帆させる手配必要であり、またその時、今から
出社できそうなのは当課で私だけらしいとのこと。何か月も放っておいた原付にてとりあ
えず会社へ向かった。

余震の続く中、ヘルメットを通して見た長田区、兵庫区の地獄絵に、さきほど感じた我
が家の被害程度などほんのかすり傷だと思い知らされた。火災はあちこちで起きているの
に消防車のサイレンさえ聞こえない。その近くに立ちつくす焼け出された人々。熱風を感
じつつ、ガラスの散乱する道路の上を、パンクの心配をしながら、なんとか会社にたどり
着いたのは昼ころだった。

その在港船を出帆させるべく手配していく中、綱放し業者が本船まで行けないかもしれ
ない、という。そこで他の課員一人とともに、自分たち二人で綱を放す、という覚悟を決
めた。本船のバースはポートアイランドであり交通遮断されている。大阪湾パイロットに
頼み込み、パイロットポートに便乗させてもらって本船に向かう。本船の岸壁側は、フェ
ンダーに激しく当たった部分にかなり目立ったへこみが発生していた。本船船長は、大揺れ
のその時、他船が衝突してきたと思い込んだそうである。結局何とか綱放し業者も出帆に
間に合い、本船は15時30分、傾いた岸壁を後にし次港を目差した。

長い1日となったこの日、阪神大震災の被害が甚大すぎたために、恐らく何年たっても
克明に思い出せるだろう。戦後二番目の人的被害となった伊勢湾台風に我が両親は遭遇し
ている。その時父は桐のタンスをボートに仕立て、臨月の母を乗せたそうである。その約
2週間後に生まれた私は“伊勢湾台風の落とし子”などと言われつつ、水害の恐ろしさを
何回も聞かされた。その経験が今回私自身に生かされたかどうかは疑問だが、この震災の
教訓も含め、危機管理の大切さを次世代に語り継いでいくべきであると、今新たに強く感
じている次第である。

1月17日5時46分、大きな揺れで目が覚める。いまだかつてない大きな揺れに驚き、慌てて飛び起きた。室内を見回り異常ないことがわかり、ガス栓を止め、隣に住む父の様子を見に行くが(母親は足の骨折で入院中)、無事を確認、一安心となる。出勤すべくJR加古川駅に行くと大変な人だかりで、地震で線路も寸断され運転できない。復旧見込みが立たないとのことから自宅に戻り、会社に電話を入れるが全くかからない。テレビをつけるが映像が出ない。

やっと9時頃に映像が入り出し、淡路島を中心とした大きな地震で、神戸地域は大変な被害が出た模様とのこと。刻々と被害状況が大きくなっており、心配しながら電話を入れるが、「あなたのおかげになった方面の電話は非常にかかりにくくなっております」とのアナウンスばかりであった。テレビでは高層ビルの倒壊映像がひっきりなしに写しだされてきた。神戸支店ビルも大正時代の建築であり、昨年改修してはいるが、この状況ではまづダメではないかとの懸念がどんどん大きくなるが連絡が全く取れない。

ようやく夕方になり、運航課玉井君より電話があり、神戸支店は無事とのこと、昨日より入港中の2隻の動静を尋ねると、2隻とも、堺、名古屋港に変更し、すでに出港したと聞き一応安心した。

翌18日6時出発、会社に向かうが、昼を過ぎても明石を越えた垂水付近で進まない。

やむなく引き返すべく、近くの公衆電話を探し、空いている電話から10回目ぐらいでやっと通じ引き返すこととした。しかしいまだ付近では崩壊した住宅等は見られず、実感として沸いていなかったが、引き返す道すがら道路の沿線には、ナベ、バケツ、ポリタンク等を持って人々が長い列を作り、買物に順番を待っている姿が方々で見られた。19日は三木方面から北区に抜けて行くことにし、約4時間ほどで三ノ宮に到着したが、そこで初めて倒壊したビル群を見て、今さらながら地震の大きさを実感することとなった。

また、救援物資受取のため、タグボートに乗船し、大阪港まで行く途中、港内を航行の際、新港、P.I.、摩耶、六甲と見るにつれ、岸壁の崩壊からコンテナの海没、ガントリークレーンのレールの広がりによる股裂け状態での折れ、特にRC-2の1基倒壊には驚きであった。そして六甲RC-6、7では液状化現象でレール間が陥落し、運河の状態を見るにつけ自然の恐ろしさを知らされた思い。それにしても神戸支店ビルは、このような各ビル群の倒壊、そして神戸港の被害が大きかったにもかかわらず、ほとんど被害を受けずに済んだことは、一昨年よりの改修の際、耐震工事を併せて行ってこられた支店長はじめ皆様方が、日頃から防災対策を十分に施されていた賜物であったと思います。

最後に、このような災害にあっても私自身もすでに仕事上も、在来線もほとんど震災前に戻り、また、新幹線、JR西日本も完全復旧し、支店のある元町では商店、食堂街が復興するにつれ、不自由さがなくなると、災害の大きさも思い出としては残るが、実感として薄れがちであった。今回6月1日付にて六甲NYKTに異動になったことから、引き継ぎ等で支店、六甲アイランド間を往復する時、交通アクセスの悪さにまだまだ地震の後遺症は続いているのだということを改めて実感したと同時に、このことはその被害者の立場に立たなければ忘れ去られていくことを痛感した。

1月17日午前5時46分阪神大震災 M7.2が発生した。私は朝4時ごろになると目が覚め、なかなか眠れないのでビデオでも見ようかと思っている時、戦後最大で未曾有の被害をもたらした阪神淡路大震災が発生した。私はその時は目を閉じたまま横になってフトンの中でした。

初めぐらぐらと横揺れがした、地震だと思ったが横になっていた。だんだんと揺れも大きくなり今度は上下に激しく揺れる。横および縦揺れの大きいのは船で何度も経験しているので、自然に身に付いていたのかあまり怖いとは思わなかったが、ますます激しく揺れるので飛び起きた。

その時、タテ揺れのドーンというものすごい音とともに私の体が5～6センチほど空中に飛ばされた。その時が M7.2、神戸震度6の烈震であった。瞬間、物が落ち、こわれ、割れる音を耳にした。隣の部屋4.5畳に寝ている家内が心配になり、大きな声で大丈夫かと声をかけたが返事がない。

家内は普段は音には敏感で気の小さい性質なのにあれだけの大きな地震があったのに、「お父さん」とも「地震や」とも言わない。心配になり家内の部屋に行こうと思ったが停電になり暗闇。

ふと私の座っている横のサイドボードの中に普段から用意していたバッテリー3個入りのトーチあるのを思いだし、手さぐりでその場所の方に行こうとしたら大きな物体に当たった。すぐテレビとわかった。私の枕元に置いてある24インチ大型テレビが今まで私が寝ていたマクラを押しつぶすように倒れていた。起きるのが2～3秒遅れていたら頭を直撃され、重傷かあるいは死に至っていたかもしれないと思いながら、トーチを取り出しスイッチを入れると明るく部屋を照らした。

家内の方を見ると高さ1メートル47センチ、横90センチ、厚45センチの引出しも入れ6段のタンスが家内を押しつぶすように倒れていた。また声をかけたが返事がない。部屋に



●地震直後の私の部屋。すんでのところテレビの直下を免れた

行こうかと急いで立ち上がった時また震度4ぐらいの揺れがきた。気にせず家内のところに行きタンスを元の場所にもどした。すごく軽く感じた。枕元を見るとタンスの上に置いていた長さ70センチ、横35センチ、高さ30センチ、重さ20キロの衣装箱が枕の3分の1の上に飛んでいた。箱の横に家内の頭と顔が並んで見えた。頭か顔のどこかをやられたと思えばいい声かけると返事がない。

よく見たが血は出ていない。フトンを横にやり、そーっと頭を起し軽くゆさぶるとアアアという声が出た。私が大きな声でどないしたかというと、「お父さん」といって私に抱きついてきた。

初め地震が起きたことは知っていたが、ドーンと大きいのがきた時、瞬間的に気をうしなっていたようだ。私は家内を起し、手を取り台所に行きテーブルの下に入れ、ふだん2人で敷いている座布団が足元にあるのを思いだし、寒いので敷いてやり、1枚は頭にかぶせ、私が着ていた毛布を身に着けさせ、私はテーブルに手をつけてどんなことがあっても家内を地震から守ってやろうと立っていた。その時また震度4ほどの地震がきた。1～2秒の後、「お父さんも入って」と私の足を力強く引っぱった。私は本震より余震が小さいことを知っていたので怖いとは思わず心配するなと軽く手を握ってやった。

5分ほど時間がすぎたが揺れもないので外に出て見ようと厚着をし、ラジオを持ってドアを開けると、天井の一部のコンクリートが大きいので10キロぐらいの物が多く落下していた。足元を照らしながら階段をおり、家のすぐ前の公園に出ると、私達と同じ階段を使っている10所帯の方も皆出ており、お互い無事を喜びあった。

少し明るくなり家に帰ると、足の踏み場もないほど物が割れ、散らかっていた。

この場を写真にと思い写した。写している時、人間の生死は紙ひとえというが、私達も紙ひとえで助かったのだと思うと急に家内がいとおしくなり、心の底より抱き締めてやった。

清原 丞 (日本郵船三機士・清原敏幸の家族)

●神戸市兵庫区

私達は、10階建の高層住宅に住んでおります。1月17日午前5時30分頃、目覚めて布団の中で新聞を読んでいました時、5時46分突然ドーンと身体を突き上げるような音と共にグラグラと20～30秒揺れ出し、一瞬のうち暗闇で家具、電気、棚の物など倒れかかり、私は瞬間に布団をかぶりましたので、ケガはありませんでした。家内が足を少々切って出血しましたが大事にならずにすみました。

なお、余震が続くので近くの区役所のロビーへ避難して二晩過ごしましたが、寒さが厳しいのと家では炊事もできないので須磨区「長女の嫁ぎ先」で一週間世話になり、わが家へ帰って見るも無残な家の中を娘夫婦に手伝ってもらい一日掛かりで整理しました。ちょうどこの日から歩道に特設の水道ができ、飲料水、水洗用の水がくめ、何とか住めるようになりました。

この度の震災で水、ガス、電気が生活にどれだけ大切かと感じております。今はもう普通の生活に戻りました。

震災そして思考と行動

上五島石油備蓄に出向するため東京に行く日の早朝、この震災に遭遇した。床下からドーンと突き上げられ、つぎの瞬間には左右に急激に揺れ、枕元には29インチのテレビが3メートル余り飛んできて、タンスの上の箱類がバタバタと落ち、床の間の大きなバリ島人形もドーンと倒れてきた。そして、電気が切れる前に、真っ先に一緒に寝ていたペットの犬を抱き上げたが、激しい揺れのため、歩くに歩けず、実際には1分間程度だったらしいが随分長くうずくまっていたように感じた。揺れが少し収まると、子供達の安否を確かめ、上着を着けさせ、一緒に外に出て、車の中でラジオを聞き情報を得ようとしたが、地震の発生を伝えるだけで、様子ははっきりわからなかった。

玄関や車の中には、ミニマグライト3本、大きなマグライト1本を置いていたので、家族各自が1本ずつ持ち歩いた。

少し冷静になり、今何をすべきか？ これから何が起こるか？ を考え、妻と娘には近くの24時間営業のコンビニ店で弁当、パン類と保存食、飲料水等を買に行かせ、私と息子は家の中の様子を確認することにした。家の中で台所は、水屋が倒れ食器類はほとんど全滅、TVやビデオも散乱し、サイドボードは倒れなかったが観音開きの戸が開き、コーヒークップや飾り皿は飛び出し、長い期間かけて収集したウイスキーやブランデーは絨毯が飲んでくれた。しかし、娘の誕生記念に買ったドルフト焼きの人形とマリア様の人形は無事だった。足元はガラスの破片で危険なので、息子には風呂を洗わせて、水を溜めるように指示し、私はガスの元バルブを閉め、田舎の親に電話で状況を話し、親戚に連絡してもらうように頼んだ。

コンビニ店は停電で、品物は散乱していたが、トーチランプと電卓で営業しており、地震後時間が経っていなかったため、客もほとんどいなくてスムーズに買い物できたらしい。しかし、帰るころにはもう20人位の人が集まってきたという。

戸外が明るくなってくると、ラジオのニュースで震災の状況が少しずつはっきりし、パニック状態になるのではないかと予想した。車で近くのガソリンスタンドに行き、暖房用の灯油とガソリンを入れ、身のまわりのものの整理を始めた。

8時には水道、都市ガス停止。電話もほとんど通話不能となる。

9時ごろ郵便局、銀行はオンラインシステム停止のため、現金の引き出し不能。10時開店のスーパーには、400メートル以上の行列ができていた。

10時ごろ電気のみ復旧。TVにより被害の状態がはっきり判明し始め、地下鉄、JR、新幹線、私鉄等も寸断しており、東京行きを諦めざるを得なくなった。生活必需物資の欠如や不足、交通の混乱等を考慮し、家族で相談したあと、しばらく、神戸を離れることを決め、交通情報を収集しようとするが集まらない。余震が続く中、怪我はしないように注意し、家族で手分けして掃除を始める。わが家だけでなく、どの家も同様に、粗大ゴミ置き場は瞬く間に溢れていた。

18時ごろ本社から連絡があり、直接出向先の長崎に飛べるように伊丹発の航空券手配の連絡があり、家族は妻の実家に避難させることとした。

今回の災害で受けた教訓

- ①関東地方に住んでいたことがあるので、ラジオや携帯用ライトを準備していたのは正解であった。これらは小型で十分であり、電池も準備し、単三で共通使用できるほうが良い。
- ②船舶に乗船していて、トラブルに巻き込まれた時と同様に、冷静に状況を判断し、他人より早く行動すること。いろいろとケーススタディをしておけば、もっとよい。
- ③現金は少なからず所持しておくこと（カードが使えない）。今回は出向直前で、現金を持っていたが、通常月曜日の早朝はあまり持っていない。
- ④冬場であれば、暖房がなくても休める寝袋のようなものがあるとよい。衣類はマウンテンパーカーのような暖かいコートが1枚は必要。
- ⑤オイルショックで経験しているように、保存食、薬品、生活用品もある程度は備えが必要と思う。大手スーパーの流通網が、あの震災でも想像以上に機能を発揮したため、パニックにならなかったのだと思う。
- ⑥このような状況では病院やタクシーもあてにならないので、病気や怪我には細心の注意をすること。

鎌田 紫 (郵船コンピュータシステム, 日本郵船神戸支店勤務)

●神戸市灘区

あの大地震からはや5カ月を経過する。街は活気を取り戻しつつあるが、まだ爪跡は大きく残る。

当日の朝は連休明け。私は、いつもより早く出勤するために朝食をとっていた中で遭遇した。遠くから押し寄せてくるような地響きとともに揺れが始まる。叫びながらストーブを消し、のせてあったやかんを持ち、壁にもたれて母と抱き合い収まるまで待った。気がつけば、物の割れる音を聞きながら「大丈夫、大丈夫」と口走っていた。生まれて初めて「家が潰れる」と感じた一瞬だった。この直後、停電になり真っ暗闇になったことが最初に困ったことだった。電話も不通になった。懐中電灯を持ち、スリッパを履いてできる範囲のガラスの処理をしたり、小型ラジオをつけた。普段未使用のこのラジオがこんな風に役立つとは……。夜明けまでどのように過ごしていたのかよく覚えていない。ただ、ラジオからの情報が時間を追うごとに状況悪化が進み、不安が募った。

9時を過ぎたころから近所の人々が外に出だす。私は被害の大きかった灘区の住民だが、山を切り開いた上に建てられた住宅地で岩盤が強く、幸いにも家屋の倒壊は周辺ではなかった。ただ、下（山の近くに住んでいるため沿線地区をこう呼んでしまう）からのサイレンや、黒煙が流れてくるのに不安は強まった。山も削られていた。直径6メートルの岩石が崩れ落ちたと後日知り、驚いた。

10時ごろ、車で大阪へ向かった。そして下の想像を絶する光景を見ることになる。火災、倒壊……毛布にくるまり呆然と座り込む人、息絶えた人も道に……。大渋滞、自主的に交通整理をする学生、父も両親を捜しに行くという全身泥々の男性を車に乗せ、近くまで運んだ。結局、大阪まで7時間を要した。

その日の昼頃電気が回復。テレビを見る。会社・友達……心配が重なった。公衆電話は

長蛇の列。ただテレビにかじりつき、情報を追う。夕方頃から電話の受信が時々できた。会社からの安否確認で、まだ二人不明だがあとは無事と知らされた。少しホッとしたと同時に残り2人の安否がなおさら心配になった。遠方の知り合いからは、夜中、明け方にもベルがなった。昼よりはかかりやすいと思ってのことらしく嬉しかった。中には久々の声もあった。

水、ガスなしの生活が始まる。バスタブ1杯と、数本のミネラルウォーターだけ。2日目に友人から情報を得、家から3分ほどの神戸大学へ……。植木の中の水道をひねってみた。水が出た！ 家に戻り、父と車であるだけの容器を積んだ。河川水のため昔は充分飲めたらしいが、やはり心配ですべて煮沸かした。幸い電磁調理器があり、ガスなしの1カ月間大活躍だった。日ごとに全国の水道局や自衛隊による給水が増えたが、その後もこの河川水には助けられ、工夫次第で洗濯もできた。お風呂は、水、ガスなしでは仕方ない。身体を拭くだけの生活が始まり、その後は行水のようにして過ごしたが、週末に大阪の父の宿泊地で、また、六甲山クラブ、山手寮、個人的にも助けていただいた。

会社からの連絡で、郵船ビルは無傷同様と知り安心していった。翌週から送り迎えをしていただき出勤できた。震災後初めての外出。状況を目の当たりにしドキドキした。帰宅後、陽の落ちた中、壊れた高速や国道の脇の自衛隊を見ると、映画のセットの中にもいるようで信じられないだけだった。たった10秒ほどの出来事とは思えなかった。次週からは自力で出勤。バスを乗り継いだ1カ月は渋滞、満員で歩くのが一番あてになった。とにかくよく歩いた。しかし、民家にはいり込み悲惨な場面にでくわし、胸が詰まったこともあった。よくこんな所から無事だったと思うような倒壊家屋の前に、無事を知らせる紙も貼られていた。焼け跡は1カ月を経過しても焦げた臭いが残っていた。

細切れに電車が開通してからは通勤も楽になり、ようやく今月、主要電鉄がほぼ全線開通する。当初の様子からは、これでもとても早いと感じる。

全国からのご支援を深く感じたこの数カ月、命残ったことを感謝し、人々の、港の、街のいち早い復興を願う。多くのものを失ってしまったあの歴史に残る瞬間の中に自分がいたことが、信じられない。

小村 千鶴子 (モスバーガー摂津本店, 三洋海事関係会社)

●神戸市東灘区

みんながんばろうね！ 元気一杯！

2月3日に営業再開。店の回りの景色はというと、倒れた家、崩れたビル、砕けて道に散乱したガラスもまだそのままにあの日を語っています。

その時、マンションの自宅で身をひそめていた私がふと窓の外を見ると上がる火の手！ 外に飛びだして見たのは無残に崩れ落ちた家また家でした。「モスもダメかもしれない」駆けつけると崩れた町並みの中にモスはちゃんと建っていた。中はひどい散乱だけれど窓ガラスが1枚割れただけ！

店の無事を確認した私は、アルバイトさん・パートさんの家を回れるだけ回りました。ペシャンコになった家の前でパジャマ姿で立ちつくすみんな……。

とにかく命の無事を確認し店に戻ると、飲み物や食べ物を求める、中には血だらけの人

に、ドリンクやパンズを分けてあげました……。

ガスも水道もまだだけれど、とにかく店を開けられた喜び。「開けてくれてありがとう」「お宅は大丈夫でしたか？」見ず知らずの人たちが声をかけ合い、自分もたいへんな被害を受けながら人を案じ、暖かい会話が店内に満ちています。食べに行こうにもあたりの飲食店はほとんど潰れ、ゆっくり座れる家もなくした人々のために、本当においしい、あたたかいものを食べさせてあげたいという気持ちでいっぱいです。

「また戻ってきたら使ってね。私は一生ここで働きたいの」ケガをした身で再開の日にかけつけてくれたパートさん。発注は大丈夫かしらと心配し、毎日電話をくれるアルバイトさん。またいっしょに働こうね。早く戻ってこられるように祈っています。奇跡的に助かったこの店で、みんなに元気をいっぱい分けてあげられるように、私は以前にも増して元気一杯！ この店で働ける喜びを心の底からかみしめています。

近藤 進 (三洋海事本店, 日本郵船 OB)

●明石市

水・水・水

神戸の西隣、明石の自宅から大阪の事務所まで山陽電車とJRの神戸線で通勤していました。ところが震災でJRの六甲道付近の高架線が2キロ近く崩壊しました。併行して阪神間を結ぶ阪急、阪神電車も不通です。神戸六甲山系の裏を走る神戸電鉄やバスではどうしても片道3時間以上かかるので通勤できません。そこで西宮の親類に震災単身赴任となりました。それで通勤の問題は解決したのですが、待っていたのは水が出ないという新しい課題でした。

17~18世紀、帆船時代の海洋小説には飲料水を厳しく節減する話がよく出てきます。人間が生命を維持するに必要な量は1日に1リットル程度ですが、現在の都市生活では、1人が250~300リットルを使っているとのこと。ところが、水道からは一滴も出ないのです。

幸いなことに西宮の親類の主人がマンションの給水塔が空にならない内に、風呂にいっぱい水をためていました。飲料水はポリ容器で給水車から運びました。その他の生活用水は一切これでまかないました。顔を洗う、ヒゲをそる等々が済んだ水は棄てずトイレへ。食器は洗う必要のない紙製を使う等、量の節約と合わせて使用方法も徹底して工夫しました。しかし大人2人が生活するのですから、2月の中旬にはこれも切れてしまいました。

水を運ぶということには改めて二つ気がつきました。一つは水を運ぶ道具が今の都市の生活には少なく、それも多量に入る大形バケツのような物がないのです。このためポリ容器、バケツの類はアツという間に売り切れ、大阪まで買いに出る人も多く、地震の影響のない所まで物がなくなりました。同じポリ容器でも、暖房用の灯油に使ったものは、油の臭いがついて飲料水には向きません。もう1つは水は重いことです。10リットルと18リットル、2種類の容器がよく使われました。普段、煙草を買いに行くにも自動車を使う生活をしている人にとっては、10リットルの水も重く感じます。西宮のマンションは1階で助かりましたが、5、6階はともかく、何十階もあるマンションは大変でしょう。あれだけの地震となりますと、電気が回復しても、エレベーターは、その点検や小修理に相当の日

数を要していました。

一方、水は意外にあるものです。学校のプールの水がそのままの所も残っていましたが、六甲山から神戸市街を通って流れる水も少しは運んでいる人も見ましたが、尽きることはありませんでした。それに大被害地西宮の東隣、尼崎市には競艇を開く幅70メートル、長さが400メートルぐらいのプールが満々と水をたたえていました。深さはよくわかりませんが、2メートルとしたらどのぐらいの水になるのでしょうか。

ついに極限にきました。こんどは1滴の液体も家庭から流してはならないというのです。目的は下水道が損傷していて、この復旧に2日を要し、もし1軒でも違反したら、工事はしないといわれました。会社に早く出て体の調子も整え、夕食は控え目にする等、水がないのとは違った苦しい2日間でした。

そして3月20日、2カ月ぶりに水道栓から水がほとぼしり、長い辛抱が終わりました。

酒井 隆夫 (大阪湾水先人会、日本郵船 OB)

●三木市

海震記

1月17日午前5時35分、淡路島洲本のパイロット宿舎を出た。寒の小雨であったが風もなく静かな夜明け前であった。水先艇に乗艇し友ヶ島沖の水先乗船地点に向かった。間もなくであった。暗い海上でプロペラ、機関、艇体に異常に激しい衝撃が走った。追い波をくらったようであった。いつものように浮遊物を引っ掛けたのではないかと、機関を止め、ペラなどを点検したが異常がなく再発進した。同じような衝撃が再びあった。余震だったのである。

6時頃、友ヶ島水道を南下中に「コウベホアン」のVHFが入る。「地震発生。津波の心配はありません」、続けて2回。そして沈黙。冷静なむしろ素っ気ない放送であった。神戸一帯に大規模な地震が発生し、大混乱しているとは知る由もない。

6時25分。神戸入港のLPG船(4万5,000トン)に乗船。韓国人船長は地震を知らなかった。紀伊水道で強烈な衝撃に襲われ、機関爆発と思い機関を停止し、点検後に航海してきたとのこと。入港予定の通知のため「神戸ポータルラジオ」を呼んだが応答はなかった(恐らく崩壊していたのだろう)。

6時50分。友ヶ島水道を通過。空が白んできた。付近の風景はいつもと変わらない。多数の漁船も操業していた。7時過。洲本沖浮標を通過。すっかり夜が明けた。小雨も止み視界もよく、静かないつもの大阪湾であった。しかしこの頃から少しずつ漁船が姿を消していった。神戸の水先艇より情報が入った。「淡路島を震源とした地震が発生し、神戸港の岸壁に相当の被害があり、阪神パイロットは乗船できない」とのこと。

神戸港が望見できるまで接近した。漁船はすっかり姿を消している。船長が「あれは火事ではないですか」という。見れば長田あたりの3カ所から空高く真黒な煙が立ち上がり、空を覆い不気味そのものであった。8時40分。港外2海里付近に投錨した。海から見る限り被害状況がわからず、船長には「岸壁をチェックし、午後にはシフトできますよ」などと無責任な言葉を残して下船。港外にはすでに先行していた7隻の大型船が投錨していた。水先艇に下船し、艇長から岸壁のほとんどが崩壊し、クレーンが倒壊し、コン

テナが流れ出しているなど大被害の状況を聞いて驚いた。

第1 航路よりメリケン棧橋に向けて帰投。第1 防波堤が沈下。三菱重工の新造船の上にクレーンが倒壊。兵庫突堤の倉庫が傾き海に落ち込み、トラック数台が海没。川崎重工の工場の屋根が波打ち、岸壁が海没し、乾ドックの新造船が傾いている。ポートアイランドのコンテナクレーンは全部傾いている。メリケンパークの護岸は大きく海に押し出されている。そして水先艇の基地、メリケン棧橋はブロック状にばらばらになり傾いて海没していた。

保安庁の岸壁に上陸。付近の地割れが大きく飛び飛びに歩く。郵船ビル、MOビル、保安庁は見る限り健在、少し安心する。信号機が止まり注意しながら横断、ビルからの落下物を避けて海岸通りを歩く。近く的高速道路が落下して下の国道2号線を塞いでいる。9時半。事務所着。玄関入口、階段、室内の壁にひびが入り、部分的に剝がれ落ちているがビルは健在。会長もすでに出勤し、配乗係もほぼ集まり、停電した暗い事務所で電話の応対に大わらわであった。

地震発生時、大阪湾も航行していた水先人嚮導の郵船の船は10隻であった。地震(海震?)の反応は場所、水深、喫水、船の大きさなどによってまちまちであったようだ。各水先人の一言描写を以下に紹介すると、「上下動が激しく船橋に立っていられなかった」「エントラ、ペラ脱落、座礁かと思った」「ドスンと下から突き上げられる」「爆発したような感じ」「激しい異常震動が船体に、約10秒」「座礁したのではないか」「ドッドドンという音と振動、振動は2度あった」「ガタガタと物凄い振動、5~10秒位」「エントラか、ブレードが飛んだと思った」「機関のクランク折損か」「プロペラがガーと鳴り、回転計が上昇した」「レーシングの時のようにガタガタと振動」などであった。

関東大震災を経験している両親に、小さい時からその物凄さをよく聞かされた。今度の阪神大震災は震度7、直下型。たったの20秒間で5,000人余の犠牲を出している。関東大震災をはるかに超えた大地震だった。私はこの強烈な縦揺れを実感することができなかったの、残念ながら子孫に語る資格がない。しかし震源地近くの大阪湾上で地震ならぬ海震の貴重な経験をしたと思っている。

坂本 季康 (日本郵船 OB)

●神戸市須磨区

被害にあってはおりませんので参考にはなりません、六甲山脈の南海側に災害が集中したことです。市街地の直下を断層が走っているの横揺れと上下動で古い家は全部が壊れたようですが、山の北側は上下動だけで横揺れはありませんでしたので被害はなくて済みました。南部では家の下敷になった死亡者が多く見られました。県知事及び市長の自衛隊の出動要請が遅れたこともその一つかと思われます。商船大学生は進んで家の瓦礫下から多数の人を助けました、その新聞を見てよくやってくれたと感激して胸がこみあげ涙が出ました。

屋根について申します。瓦屋根は土の重さと瓦の重さで山の北側でも瓦の落ちた被害が見られますが、プレハブ住宅は屋根が軽いので被害は見受けられませんでした。2階建てについて、2階には重い荷物は置かないことです。家が潰れた場合に天井が落ち1階は危

険です。2階にいた人は救助しやすいが、1階で下敷になった場合は救助しにくく死亡者も多かったそうです。

震度6、7の場合、電気・水道・ガスなど全部止まりますが、山の北方面は電気・ガスは止まりませんでした。水道のみ4、5日止まりました。南部は何カ月も止まったことと思います。道路および食料について、JRや私鉄および高速道路など全部が被災したので通勤もできず、食料品の輸送ができないので10日間ほど困ったようです。

須磨寺の昔の書類に300年ほど昔に大震災の記事があったと新聞は報じています。阪神高速道路はなぜ簡単に倒れたか、一本足の道路でもつはずがない。東京方面は鉄板を巻いてあります。今後、道路、鉄道、地下鉄、ビル、マンションおよび一般の住宅はさらに震災対策のことを研究し、建設してもらいたい。200、300年に1回ぐらいの大震災では、建物は古くなります。断層の上その近くには住宅は建てないこと、何百年したらくるかわからないので震災に備えることは無理なようです。

笹井 孝彦 (日本郵船 OB)

●神戸市北区

世間には、確証もないのになんとなく周囲の影響を受けて、知らず知らずに信じてしまうことがある。さてその一つにべつに根拠もないくせに、我々神戸市民には「神戸には絶対に地震はない」という思い入れが周知徹底していた。だから関東地方で騒がれている多分近い将来、伊豆地方に地震発生が予想されるという記事についても、まったく別世界のこととしか感じていなかったことは事実である。

そこでまったくその存在を無視され、プライドを傷つけられ、隠忍自重久しきに渡っていたが、ついに憤慨その極に達した神戸に年古く住む地下の大鯨が、活断層の活動という旗印のもとに、断々固として暴れ出したのが今回の阪神大震災であったと、心ならずも受けとめている。

幸いにして我が家は、区役所の認定による一部損壊という程度にとどまり、心から良かったなあと感謝している。もし不幸にして全壊、半壊の大被害を受けていれば、その復旧費用の捻出に今頃大変な苦勞をしていると推定される。年金生活の高齢者、貯金もたいしてある訳でなし（ここは威張れるところではないが…）、もちろん銀行が貸してくれるはずもないが、もし借りられたとしても返済のめどが立たず、まさしく虞や虞や汝を如何にせん！ということになったと思うと慄然とする。

この地震で非常にうれしかったことは、長いこと音信がなかった各地の懐かしい大先輩や思いがけない旧友、そして後輩から多数のお見舞をいただいたことである。（もちろんそれらの方以外にも電話回線の都合で、残念ながら会話することができなかったたくさんの方達がいたことと確信しているが……）

そして陸上社員の上司、同僚、後輩の方達からもたくさんのお見舞をいただいたが、とくに海上社員だったその昔、乗り合わせて世界中を共にまわった古い仲間達、あちらこちらでお互いに悪い事を競いあった？ 仲間達からの励ましの言葉は、電気・ガス・水道いわゆるライフラインが欠け、苦勞の日々が続いた時であり、何にもましてうれしく胸に響くものがあった。

俗っぽく表現すれば「やはり板子一枚下は地獄といわれる船に乗っていた昔の仲間は、忘れられない人情があったねえ」とすっかり感心、懐旧にふけたものであった。

さて最近とくに感じることは、さすがはミナト神戸、郵船 OB といえば東京よりはるかに尊敬？されるようである。なんといっても「窓を開ければ必ず二引の旗が見えた」のである。実力以上に尊敬されるのも、いささか面はゆい面もあるが、まあ好きなように思ってくれと居直っている今日この頃である。

諸般の情勢は厳しく、ミナト神戸の復興には多難なものがあると思われるが、我が社なりの方針によって、然るべくお力添えの程を心から期待申し上げる次第である。

薩川 吉夫 (内海水先人会, 日本郵船 OB)

●明石市

阪神・淡路大震災と息子の結婚式

内海パイロットの薩川は1月16日の夕刻広島から明石市内の自宅にもどった。

明日までの1週間は広島でのハーバー当直勤務になっていたが、18日神戸市の舞子ビラで次男が結婚式を挙げるため3日間の休暇をとっての帰宅であった。

薩川の兄弟たちや長男は東京、横浜、静岡から17日の昼頃に到着し、夜はホテルで盛大に前夜祭をするのを楽しみにしていた。結婚式の準備やチェックを終えて就寝したのは午前1時を少し回った頃であった。

17日午前5時46分、突然の激震に眠りを破られた。ドーンと突き上げられ、それから下へたたきつけられ、激しくゆすぶられる衝撃は全速前進中の船舶が機関を停止、続いて全速後進を発動したときの振動に似ていた。

激震は約20秒続き、さらに余震が長く、短く築18年の木造家屋を激しく揺すった。未曾有の直下型大地震に柱や家具は悲鳴を上げ続けたが、夫婦は身動きもできず、ベッドで布団を被ってじっとしていた。

やがて異常な静寂がやってきた。犬の鳴き声も聞こえない。家は潰れないでもちこたえた。やっと取り出した携帯ラジオは「阪神高速道路が落ちました」と緊迫した情報を伝えていた。地震の揺れの最中も、家がもちこたえるかなという心配と、息子の結婚式はどうなるのだろうかという思いが交錯した。

懐中電灯をたよりに起き出すと電気、ガス、水道のライフラインはすべて切れ、飾り棚から落ちた花瓶、酒瓶、食器類が散乱していた。

室内を点検…バス、トイレのタイル損傷多数

屋外を点検…屋根瓦落下、外壁亀裂多数、大谷石の門・塀全滅

ルルと電話が微かに鳴った。結婚式に出席するため東京駅まで来て地震を知った長男からの電話であった。こちらは二人とも無事、結婚式への出発は見合わすように親戚関係に伝えてもらった。わずか2～3分の会話であったがありがたかった。これを最後に我が家の電話は不通となった。

午前8時、電気復旧、テレビも少しづつ地震情報を流し出し、震源地を淡路島北部と伝えた。公衆電話を使って次男と加古川にいる結婚相手と連絡がとれたのは正午頃であった。

午後から相談に訪れた舞子ビラは建物の損傷はなかったが付近の被災者が避難していた。

舞子ビラの福田課長は、明日の結婚式は全力をあげてやらせてもらいますとってくれた。1月18日、快晴。震源の淡路島は目前である。夜中のうちに豊中を出発した仲人さんの車も枚方を出発した主賓の車も途中で神戸行を断念した。鹿児島から大阪空港に着いた親戚はそのまま鹿児島へ帰っていった。舞子ビラの建物は余震で鈍く揺れ、窓の外を消防車と救急車のサイレンが通り過ぎる中で結婚式と披露は行われた。出席者は3分の1しか居なくても、多くの人々の善意と協力で盛り上がった素晴らしいものであった。両家を代表しての薩川の挨拶は大地震で道路が寸断された中を必死で駆けつけて下さった方々と、駆けつけようとして果たせなかった方々に、ただ、感謝、感謝であった。

佐藤 邦夫 (大阪湾水先人会, 日本郵船 OB)

●神戸市須磨区

須磨海岸より北へ約7km、海拔約200mの丘陵地にある団地の幹線道路に面した軽量鉄骨構造プレハブ2階建て。私はその2階寝室で、夢現の中、突然、階下にダンプカーが飛び込んだような家全体が激しく突き上げられる衝撃、続く激しい横揺れに目が覚めた。何が起こったのか一瞬意識が定まらず、家中で物が落ちる音と家全体の激しいきしみに地震とわかり、「この家は地震に強いから大丈夫」と傍らの妻を励ましながらも、あまりの激しい揺れに潰れはしないかと不安におののきながら布団の中でじっと耐えるしかなかった。寝室はクローゼット物入れでタンスなどの家具類がなく、物が倒れ掛かる心配のない最も安全な部屋であった。

地震計の記録では、5時46分52秒から10秒間といわれたが20秒くらい揺れていたように長く感じられた。神戸に地震が起こるなどと思っても及ばず、なんら防災準備はしていない。停電のため暗い室内を手探りで落下物を押し分け、かろうじてトーチランプを探し出すことができた。装飾品の多い1階居間は、飾棚の扉が開いて中の飾物がとび出し、テレビや家具の上のものはすべて落下、陶器やガラスの破片が散乱して足を踏み入れる隙間もない惨状であった。

明るくなってから片付けにかかったが、絨毯の目に食い込んだ細かい破片は電気掃除機が使えるようになるまで取り除くことができなかった。破損品の中には外国土産品が多くそれぞれに思い出があって愛情の念たち難く、細かい破片に至るまで捨てずにダンボールに回収し、後日修復できるものを選び出せるように配慮した。家は南向きで、家具はほとんど南北方向に配列していた。この一帯は南北方向の揺れであったため、家具倒れがなく装飾品の被害程度で済んだことは不幸中の幸いであった。食器類はシステムキッチンの陶器戸棚の中で割れずに健在であった。引き戸式家具の戸は開いたものはないが、マグネットロック式の観音開き扉戸はほとんど開いて中の物が落下した。鉄骨構造プレハブは台所や浴室のタイル、土台のコンクリートなどにヘアークラックがみられたものの、建具のゆがみはほとんど生じなかった。近所では食器棚や家具が倒れた家も多く、モルタル壁の亀裂や剝離、屋根瓦がずれるなど日本家屋に被害が目立った。

地震と同時に電気、ガスは停止、約3時間後に復旧した。水道は通っていたが、隣家前の地中配管が破裂してアスファルトと側溝の継目から湧水していたため、水圧が下がり蛇口から水は出さず断水同様であった。早晚断水が予想されたので、バケツやポリ容器を総動

員してこの湧水を汲みおき飲料水の確保に努めた。数時間後には元栓が閉鎖され、完全断水となり、以後約半月間は不自由な生活を余儀なくされた。庭に約1坪弱の小池があり、また風呂水が残っていたことが、トイレや洗い物の雑用水に利用でき非常に役立った。

電話は地震直後から回線がパンクして常時話し中の状態が続き通話できなくなり、一般回線と異なる回線の国際電話公衆電話はかかりやすく、利用者が殺到して長い行列ができた。以上、被害の少なかった須磨山手地区における震災体験を報告します。

真田 勝弘 (日本郵船 OB)

●神戸市垂水区



●液状化現象によって道路が陥没した六甲アイランド



●三宮センター街も無惨な姿に変貌していた



●地震後の火災に見舞われた長田区の商店街



●市内至る所が瓦礫の山と化していた